チベットにおける大蔵経（カンギュル・テンギュル）開版の歴史概観——ナルタンを思い起こすメロディー——

白館　戒雲（ツルティム・ケサン著）
伴　真一朗（訳注）

訳者序言

本書はTsultirm［2003］の訳注である。著者白館戒雲（ツルティム・ケサン）氏は1942年に西チベットのシェーカルに生まれ、正確な年代は不明であるが若くして出家し、1959年にインドに亡命した。インドにおいてニマ・ギェルツェン（'jam mgon nyi ma rgyal mtshan, 1918-1987）、ラキャブパ（lha skyabs pa, ?-1976）、ダライラマ14世の教師を務めたティチャン・ロサンイェシェー（khri chang blo bzang ye shes, 1901-1981）等のチベット仏教の高僧に師事した。1974年に国際仏教徒協会の要請に応じて来日し、その後還俗して大谷大学の教員となり、現在は大谷大学名誉教授である［ツルティム2008：2-3］。ツルティム・藤仲［2005a, b］等のチベット仏教学に関する著作は数多く、長年の講義や研究会を通じて与えた学問的影響は仏教学のみならず歴史学や言語学等日本のチベット学全体に及んでいると考えられる。それらの中でも、本訳の原著であるTsultirm［2003］はチベット語で書かれたチベット語カンギュル・テンギュル大蔵経の開版史についての概説書兼研究書である。西暦９世紀から20世紀にわたる約一千年の間、幾度も行なわれたチベット大蔵経編纂・開版の歴史が述べられている。

周知の如くサンスクリット語からチベット語に翻訳された仏典の叢書といえるチベット語大蔵経は、漢語大蔵経、パーリ語大蔵経と並んで仏教経典の全貌を現在に伝えるものである。特にチベット語大蔵経は諸大蔵経の中でも収録されている経典が最も多く、またサンスクリット文に最も復元しやすい訳文である特長もあって仏教学の発展に大きく寄与してきた。その重要性はサンスクリット写本の経典が続々と発見されつつある現状においても損なわれることは無いだろう。しかし従来のチベット語大蔵経に関する研究はEimer［1983］や

Harrison［1996］に代表されるように大蔵経に収録されている経典の構成や系統に関する文献学的な考察が主であり、チベット語大蔵経の編纂・開版がどのような人々によってどのように行なわれたのかについて述べた研究はあまり多くはない。

その数少ない研究の中でも主なものを紹介すると、羽田野伯猷「チベット流伝前期の王室仏教備考」［羽田野 1986］「チベット大蔵経縁起　1」「チベット大蔵経縁起　2」「永楽刻チベット蔵経おぼえ書き」［いずれも羽田野 1987］、今枝［1989］、dung dkar blo bzang ’phrin las［2004］がある。羽田野氏の研究は大蔵経の編纂・開版をめぐる歴史的背景を詳細に述べたものであるが、その範囲は一部の大蔵経にとどまり、全体に及ぶものではない。今枝［1989］はチベット語大蔵経全体の歴史について過不足なく叙述した概説であり、チベット語大蔵経史についての基礎的研究であるが、その記述は本書と比べると簡略である。dung dkar blo bzang ’phrin las［2004］はチベットにおける文献の収集とその情報の提示について述べた目録学の概説というべきもので、大蔵経の編纂について述べた部分もあるが、大蔵経についての専論ではない。原著は元ゲルク派僧侶である著者の学識が反映された大蔵経の総合的な概説書兼研究書として、欧文・中文・和文の研究の参照は少ないものの、重要な価値を持つと考えられる。

和訳にあたっては、原著の本文及び引用史料は複雑な文体を持つチベット文であるため、明快な日本語への翻訳は困難であった。直訳しただけでは舌足らずになると考えられる箇所は〔　〕内に文言を入れて補った。また、原著ではチベット文の慣例として、人名や書名には多くの称号・肩書・美称・尊称が形容詞としてつけられており、これを直訳すると煩雑な日本語になる。そのため和訳では適宜省略した。ただ、原著にある比喩表現のほとんどは日本語には無いものであるが、原文を尊重して忠実に訳した。一読して意味がわからないと考えられるものは訳注で解説した。

また、原著には注が附されているが、チベット人にとって周知である人名については、それが日本人にとって馴染みの無い人名であっても詳しい解説が無い。そのため、チベット学を専門としない読者を想定した訳注をつけた。また、チベット語大蔵経の開版事業についてはモンゴル人、漢人、満洲人がスポンサーとなる事例が多く、彼らとチベットとの関係史について述べることは、開版

事業の歴史的背景を理解する上で重要であると考えられる。これについては東洋史の分野において研究の蓄積がある。しかし、原著は東洋史の分野の先行研究の利用が少ない。訳注ではこの分野の先行研究を多く利用して原著とは異なる視点から開版事業の歴史的背景をみることができるように試みた。その一方で仏教学の分野についての訳注は不備がある可能性がある。これについてはHarrison［1996］、佐藤［2008：71-92］を併せ読まれればチベット語大蔵経についての近年の研究成果の知見が得られるので参照願いたい。

本書の和訳においては、著者であるツルティム・ケサン師から多くの教えを受けた。師の教えが無かったら複雑な構成を持つチベット文やチベット語独特の表現のほとんどが訳者には理解できなかっただろう。その点では本書は著者と訳者の共訳といえるかもしれない。また大谷大学専任講師三宅伸一郎氏からは訳稿について多くのアドバイスを頂いた。記して謝意を述べたい。しかし、訳文や訳注に関する責任は全て訳者にある。なお、原著に引用されている参考史料は出来る限り原典にあたったが、参照できなかった文献もある。本文中における脚注は原注、（　　）で囲った尾注は訳注である。

目　次

1　デンカル（ldan dkar）宮殿のカンギュル・テンギュル
2　ナルタン（snar thang）本[(1)]カンギュル・テンギュル
3　カンギュルの開版事業[(2)]について
3.1　ツェルパ（tshal pa）本カンギュルとチョンギェー（'phyon rgyas）本カンギュル
3.2　永楽（g-yung los）版カンギュル
3.3　ギャンツェ（rgyal rtse）のテンパンマ（them spang ma）本
3.4　万暦（dben lis）版カンギュル
3.5　リタン（li thang）版カンギュル
3.6　北京（pe cin）版カンギュル
3.7　チョネ（co ne）版カンギュル
3.8　ナルタン（snar thang）版カンギュル
3.9　デルゲ（sde dge）版カンギュル
3.10　ラギャ（rwa rgya）版カンギュル

3.11　モンゴルのフレー（khu re）版カンギュル
3.12　ショル（zhol）版カンギュル
3.13　ワラ（wa ra）版カンギュル
3.14　チャムド（chab mdo）版カンギュル
4　テンギュルの開版事業[3]について
4.1　シャル本（zhwa lu）テンギュル
4.2　ネドン（sne gdong）本テンギュル
4.3　ギャンツェ本テンギュル
4.4　チョンギェー（'phyong rgyas）のチンパルタクツェ（'phying bar stag rtse）宮殿のテンギュル
4.5　北京版テンギュル
4.6　ナルタン版テンギュル
4.7　デルゲ版テンギュル
4.8　チョネ版テンギュル
5　北京版カンギュルとテンギュルの構成について
6　チベットにおいて、カンギュル•テンギュルをどのように崇拝するかについて

1.　デンカル（ldan dkar）宮殿のカンギュル・テンギュル[4]

デンカル（ldan dkar）宮殿のカンギュル・テンギュルについて述べる。大翻訳官ペルツェク（dpal brtsegs[5]）とクン・ルイワンポ（'khon klu'i dbang po）等が、トンタン・デンカル（stong thang ldan dkar）宮殿に安置されていた仏説と論書をチベット語に訳し校訂したものを全て収録した目録である『デンカルマ目録（*dkar chag ldan dkar ma*）[1]』には以下のように述べられている。

> 世尊の教流の会議において[6]、チベットの国土で翻訳された全ての正法の表題の目録を書くことが決められ、龍の年（AD. 824）にデンカル宮殿におられた祖師で翻訳官の大徳ペルツェクと大徳クン・ルイワンポ[7]等が正法の大

1　D No. 4364. 訳者：Lalou［1953］に本文のトランスクリプトと収録している典籍の索引があり、また芳村［1974］に校訂テキストがある。

小乗の経部と……[2]

それに続いて

経部の経典と論書全ての頌（sho lo ka）と巻（bam po）の数を確定して、校訂し終えた全てについて龍の年（AD. 824）にデンカル宮殿で表題の目録を作った。[3]

と述べられている。それと同じように『プトン仏教史（*bu ston chos 'byung*）』[4]には

トンタン•デンカル宮殿の目録と、その後のサムイェー•チムプ（bsam yas mchims phu）目録と、その後のパンタン・カメー（'phang thang ka med）目録[5]と、後のナルタン本テンギュル総目録と、大訳師ンゴク・ロデンシェーラプ（rngog blo ldan shes rab, 1059-1109[(8)]）が訳したものと彼がお書きになった目録と、ルメー等の顕密の分類と順序についての目録等をもとにした。

と書かれている。巻数もプトンの『般若波羅蜜多優波提舎論現観荘厳註に対する広釈、阿含の穂（*phar phyin lung gi snye ma*）』[6]には

2　Jo 294b7-295a1.

3　Jo 310a7.

4　Toh. No. 5197, Ya209b5-6.

5　ラサの西藏博物館（gshoms ston khang）にウーメ体の27葉の写本で、その表題に「ヤルルン・パンタンカメー（yar lung 'phang thang ka med）にある仏説と論書で経教を主に収録している目録、法王ロペン（lo paNa）等が編集したとされているもの」というタイトルのものがある。訳者：これを活字本として出版したのが *dKar chag 'Phang thang ma*. In *dKar chag 'phang thang ma; sGra sbyor bam po gnyis pa*.『旁塘目録；声明要領二帙』（Bod ljong rten rdzas bshams mdzod khang gi rtsa che'i dpe rnying gces sgrig dpe tshogs. 西藏博物館古籍叢書 1）北京：民族出版社、2003、pp. 1-67。それにもとづいて、典籍番号をつけたローマ字テキストとその注記をつけたテキスト研究が川越［2005b］。パンタン目録については川越［2005a］、Halkias［2004］がある。

6　Toh. No. 5173.

大巻は1000の３分の１頌を１巻とし、小巻は300頌を１巻とする。この場合〔の巻と〕は小巻の事である。サンスクリットの経典は1500頌（『注釈（*'grel pa don gsal*）』）という。頌については、韻文であるなら４句で１頌、散文なら32音節で１頌と数える。[7]

と書かれている。以上のようにトンタン・デンカル宮殿でチベット語に翻訳された仏説・論書の全ての編纂と目録作成がチベット史上最初に行なわれた。

しかし一切智者シトゥ・チューキジュンネー（si tu chos kyi 'byung gnas）がお書きになった『デルゲ版カンギュル目録（*sde dge bka' 'gyur dkar chag*）』又の名を『チベット語経典の印刷の解説―智慧ある信仰のクナダが開いた若い月の光の藤―（*bde bar gshegs pa'i bka' gangs can gyi brdas drangs pa'i phyi mo'i tshogs ji snyed pa par du bsgrubs pa'i tshul las nye bar brtsams pa'i gtam bzang po blo ldan mos pa'i ku-nda yongs su kha phyed ba'i zla 'od gzhon nu'i 'khri shing*[(9)]）』には

> 法王であるセーナレクジンユン（sad na legs mjing yon[(10)]）の治世において、翻訳官である大徳ペルツェグ・ラクシタ（dpal brtsegs ra-kSHi ta）とチューキニンポ（chos kyi snying po）とデーヴェンドラ（de we-ndra）とペルギフンポ（dpal gyi lhun po）等が、パンタンカメーの経堂にある経典に対して、８音節ずつで１句、それを４つで１頌、それが300で１巻という基準を定めた。その基準によって〔典籍の巻数が〕決められ、表題においてこの章はこれだけの巻数と間違いなく述べているものがパンタンマ目録と呼ばれている。この有雪の国チベットで勝利者の教えの翻訳全てが一つにまとめられた最初のものだと知られている。その後でトンタン・デンカル大宮殿にある経典に対して訳師ペルツェグとクン・ナーゲンダラクシタが校訂し終えたものを一つにまとめて目録が書かれたものについてはデンカルマ目録として知られるようになった。[8]

とあり、後世の学者の智慧の程を試すために[(11)]、パンタンマ目録がチベットにおけるカンギュル・テンギュルの目録の最初であると書いている。

7　Tsha5b5-6.

8　Ta 203a2-5, p. 407.

それに従ってデルゲ版カンギュルの主校訂者を務めた大学者ツルティム・リンチェン（tshul khrims rin chen）の著作である『デルゲ版テンギュルの目録―福徳の雲が覆う素晴らしいお話•海が増える新しい月―（*sde dge bstan gyur dkar chag gam kun mkhyen nyi ma'i gnyen gyi bka' lung spyi dang bye brag gi dgongs don rnam par 'grel pa'i bstan bcos gangs can pa'i skad du 'gyur ro 'tshal gyi chos sbyin rgyun mi 'chad pa'i ngo mtshar 'phrul gyi phyi mo rdzogs ldan bskal ba'i bsod nams kyi sprin phung rgyas par dkrigs pa'i tshul las brtsams pa'i gtam ngo mtshar chu gter 'phel ba'i zla ba gsar pa*）』と大学者トゥンカルリンポチェ（dung dkar rin po che）による『チベットにおける文献目録成立史（*bod du dkar chag ji ltar byung ba'i lo rgyus*）』[9]もその説を正しい説として書いているのは、前述したデンカルマ目録等とは直接矛盾しているので、正しくない。[(12)]デンカルの目録というのは龍の年にデンカル宮殿で表題の目録として作られたと述べられている。この龍の年が西暦824年に確定できることを、私ツルティムケサンは『前伝期の仏教史とそれに関する年代の決定』[10]で詳しく証明した。[(13)]

その目録の中の経部は『律本事』（D No. 1, Ka-Nga）12700頌、『律分別』（D No. 3, Ca-nya）24900頌、『律小事』（D No. 6, Tha-Da）24600頌、『律上分』（D No. 7, Na）19600頌をはじめとするほとんどの律と、『般若波羅蜜多十萬頌』（D No. 8, Ka-Na）、『般若波羅蜜多二萬五千頌』（nyi khri, D No. 7, Ka-Ga）[(14)]、『般若波羅蜜多壱萬八千頌と名づくる大乗経』（D No. 10, Ka-Ga）『般若波羅蜜多八千頌』（D No. 12, Ka）をはじめとするほとんどの般若と、『大方広仏華厳経』（D No. 44, Ka-Nga）45章以上には39030頌、『大宝積経三律儀会第一』（D No. 45, Ka-Cha）49章以上、『賢劫経』（D No. 94, Ka-'Aḥ）、密教部では『大毘慮遮那成仏神変加持経』（D No. 494, Tha）等をはじめとする無上ヨーガ以外のタントラ（rgyud sde 'og ma）の経典がある程度あり、経の経疏部では『般若波羅蜜多優波提舎論現観荘厳』（D No. 3786, Ka）、『般若波羅蜜多優波提舎論現観荘厳の小注』（D No. 3793, ja）等をはじめとするたくさんの般若経典の注釈、『根本中観頌般若』（D

9　*Dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung rtsom phyogs bsgrigs.* Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang. 中国蔵学出版社　1997, p. 338, II. 17-19.

10　Khang dkar Tshul khrims skal bzang, *bsTan pa snga dar gyi chos 'byung 'brel yod dang bcas pa'i dus rabs kyi mtha' dpyod 'phrul gyi me long*, Published by the Western Tibetan Cultural Association, New Delhi, 1985, pp. 91-94.

No3824, Tsa)、『般若燈論』(D No. 3853, Tsha)、『智慧燈広注』(D No. 3859, Wa-Za)、『二諦分別頌』(D No. 3881-2, Sa)、『中観明』(D No. 3887, Sa) 等をはじめとする、阿闍梨月称 (zla grags) 以外の人が書いた著作の多くと、『瑜伽行五部』(D No. 4035-4043, Tshi-'i)、『摂大乗論』(D No. 4048, Ri)、『阿毘達磨集』(D No. 4949, Ri)、『摂大乗会釈』(D No. 4051, Ri)、『大乗荘厳経論』(D No. 4020, Phi)、『大乗荘厳経論』(D No. 4026, Phi) 等をはじめとする教証に従う唯識派のほとんどの論書。『施設論』(D Nos. 4086-88, I)、『阿毘達磨倶舎論本頌』(D No. 4089, Ku)、その注 (D No. 4090, Ku)、『阿毘達磨顕宗論』(D No. 4092, Gu-Ngu) 等をはじめとするほとんどの倶舎の注釈、『律経』(D No. 4117, Wu)、『百一作法』(D No. 4118, Wu) 等の律のほとんどの注釈、『無相思塵論』(D No. 4205, Ce)、『自注』(D No. 4206, Ce) 等をはじめとする仏説と論書が734種類集められた。

それらの仏説と論書も翻訳官とパンディタ等が土の羊の年 (西暦779年) から翻訳をはじめて西暦824年までの短い間に翻訳したので、チベット人たちが翻訳官やパンディタ達は魔術師であると讃えたことは事実である。他にも注意すべきことは『デンカルマ目録』に

> 小乗の経部として『正念所経』12900頌で43巻以上訳した。『業一百』11100頌[11]

とある等、小乗の経部についてはっきりと書かれている。ケートゥプジェ (mkhas grub rje)[(15)] の『タントラ部建立広釈』に

> 『正法念所経』(D No. 340, Ha) と『方広大荘厳経』(D No. 95, Kha) と『業一百』(D No. 340, Ha) と『撰集百縁経』(D No. 343, aM) 等も釈迦が最初に説いた経部に属する[12]

とあるのも、それが根拠である。他にもデンカルマに

> 論書の途中訳に『中観の摧破と名付くる経』(D No. 3826, Tsa) と『その注釈』(D No. 3830, Tsa) 等の二つ、『中観心頌』(D No. 3855) と『中観心註思擢炎』二つ、『量決擇』11巻、『量決擇註』18巻、『諍正理と名付くる論』

11　Jo300a4-5.

12　Toh. No. 5489, Nya 10a4.

１巻、『攝真性頌』１巻、『攝真性難語釈』等の二つ[13]

と述べられていることから因明の注釈は前伝期に翻訳されたことがわかるが、現存する翻訳の奥書ではそれについて述べられていない。そのためタクツァン・ロツァワ・シェーラプリンチェン（stag tshang lo tsā ba shes rab rin chen 1405-？）著『五明が全てわかる本（*rig gnas kun shes*）』に述べられている

> 論疏と『量釈頌』・『量決擇』及びその大注釈[16]は後伝期の訳師マゲロ（rma dge blo）等によって最初に訳された[14]。

という意見を正しいとするのは少々難しいのではないだろうか。他にも『般若燈論』（D. 3853）をはじめとする他の論書の途中訳についても、現存する翻訳の奥書には後伝期の訳師のお名前以外は書かれていない理由を研究するべきである。

2.　ナルタン（snar thang）本カンギュル・テンギュル[17]

ナルタン本カンギュル・テンギュルについて述べる。『テプテルゴンポ（*deb ther sngon po*）』[15]に

> チョムデン・リクペーレルティ（bcom ldan rigs pa'i ral gri）はプタン（phu thang）の人である。サムイェ（bsam yas）寺の白チョルテンで出家した。ガワドン（dga' ba gdong）[16]でヤルニマ・ツォンドゥ（dbyar nyi ma brtson 'grus）のもとで波羅蜜多の教えを学んでいる時、〔身体に〕炭疽病の症状があらわれ、ナルタン（snar thang）[17]のキョトンパ（skyo ston pa, 1219-1299）のところに治療に行った。そのキョトンパというのは太陽を目で見ずに金剛手に親近することを11年なさったひとである。チョムレル（bcom ral＝チョムデン・リクペーレルティ）がナルタンの門におみ足を置くのと同時に、朝日が上りナルタンの僧侶が〔朝礼の召集の〕法螺を吹いたので善い縁起と

13　Jo 310b5-7.

14　kha25a-4.

15　『テプテルゴンポ（*deb ther sngon po*）』のチャ cha 章。ンゴグ（rngog）翻訳師とその弟子について述べた箇所。四川民族出版社1984　Vol. I, p. 409, l. 12.

理解された。それに対してキョトンパが「あなたのこの病はひどくならない。あなたは量決択のテキストを向こうの谷[18]で勉強しなさい」とおっしゃったので、ナルタンの外のある洞窟で量決択（D No. 4211, Ce）を千回読誦し、それによって病は去った。それからナルタン寺にお住まいになった。学問をしつつ不動明王の念修[19]を13億回なさったので〔心で〕智慧の光が輝き[20]、四つの護法神が随従をして講説と聴聞をなさったので、学者になった弟子がとても多く、〔チベットにいる〕三分の二の三蔵法師がナルタンに集まったといわれた。

大学者ジャムペーヤン（'jam pa'i dbyangs, ?–1289）[21]もこの人の弟子で、ある時に勉強の合間に悪魔の格好をしてチョムデン・リクペーラルティに悪戯をしたので、きつくしかられ、先生の下に居ることができなくなった。そしてサキャに行かれ、モンゴルに招請されてブヤントゥ（bh'un yan du）皇帝[22]の福田となられた。そこで『ツェーマ•ナムデル（*tshad ma rnam 'grel,* Skt. *Pramāṇavārttika*）』に対する広略二つの注釈を著作した[23]。〔ジャムペーヤンは〕勅使をチョムデン・リクペーラルティのもとに何回も送っても少しもお喜びにならなかった。最後に墨の小箱一つ贈った所、チョムデン・リクペーラルティはとても喜ばれて、その墨を使って論書を16帙（pu sti）程お書きになった[18]。

大学者ウーパ•ロセル（dbus pa blo gsal）と呼ばれる人はチョムレル（チ

16　チョナン•ターラナータによる『ニャンの国の東と西とその間の三つの地域の素晴らしいお話の善説―学者の入門―（*jo nang t'a ra na tha'i myang yul stod smad bar gsum gyi ngo mtshar gtam gyi legs bshad mkhas pa'i 'jug ngogs*）』（西蔵人民出版社1983：134–135）には「テン（steng）翻訳師ツルティムジュンネー（tshul khrims 'byung gnas）が御年15歳の時にパナム（pa snam）のガドン（dga' sdong＝ガワドン）でギャ（rgya）家の律保持者のもとで出家した」とある。チベットで有名な大学者ヤルニマツォンドゥ（dbyar nyi ma brston 'grus）がガドンの僧院長をなさって講説と聴聞を広大な法輪を回しなさったのもこのガドンである。ヤルニマよりヤルタンパ・リクレル（dbyar thang pa rig ral）がたくさんの教えを受けたのと、学問にとても努力なさったのもガドンである。リクレルはここで病気にもなった。

17　リポ・ランチェン山（ri bo glang chen）の山すその平原に、西暦1153年にカダム派の善知識シャラワ（sha ra ba）の弟子テュムトン•ロトータクパ（gtum stong blo gros grags pa）が建立なさったツァン地方のカダム派の最大の寺院である。

ョムデン・リクペーレルティ）とジャムヤン（ジャムペーヤン）二人の弟子である。チョムレルが仏説の巻数と〔翻訳者の名前を書いた〕奥書き等を確定なさった。論書等もそれぞればらばらになっているものを集めて[19]、『論書―広い教え―（*bstab bcos bstan pa rgyas pa*）』という目録をお作りになった。その後、僧ジャムヤンがたくさんの物資を献上した。〔チョムレルが〕ウーパ・ロセル等にチベット語のカンギュル・テンギュルを建立してナルタン寺の堂に安置せよと命令し、ウーパ・ロセル・チャンチュプイェシェー（dbus pa blo gsal byang chub ye shes）と訳師ソナムウーセル（bsod nams 'od zer）とギャンロン・チャンチュプブム（rgyang rong byang chub 'bum）の三人がとても努力してカンギュル•テンギュルの原本を探して、〔それをもとに〕建立してジャムラカンという経堂（gtsug lag khang）に安置なさった。

〔それを原本にして〕他のところに広がって、上手のトムパ•サキャ（grom pa sa skya）とカプ・クンタン（khab gung thang）にも広まり、下手のツェル・クンタン（'tshal gung thang）においても、プトン・リンポチェが三回ナルタンからテンギュルを招請し、重複しているところを取り除いた。ナルタンのテンギュルはまったく最初のもので、手に入れた原本全てをまとめたので、それまで経典の序列がなかったものをきちんと順序付けた。新しい法を１千余り加えて、シャルの経堂に安置した。

それを原本にしてシカ・リンプン（gzhi ka rin spungs）で軌範師ナムカーギェルツェン（nam mkha' rgyal mtshan）が建立し、ツェタン（rtses thang）の寺院に安置した。それを原本にしたものがゴンカル（gong dkar）とデンサテル（gdan sa thel）に安置された。後にカムパ達がそれぞれ建立してカムに持っていったのと、それらそのものを原本にしてカムに建立したのとチョジェ・トンパドンダンパ（chos rje mthong pa don ldan pa）が建立したものと、ウィでトゥ・エンシャワ（du dban sha ba）が建立したものとツル

18　とても喜ばしい状況は全集の写本すべてが現在デプン（'bras spungs）のネーチュラカン（gnas bcu lha khang）にあることである。またカムトゥル・ソナムトントゥブ（khams sprul bsod nams don grub）によればチョムデンリクレルの著作16帙、総数4800葉がコンピューターに入れられて出版される計画があるということである。

19　カンギュルとテンギュルの目録。

プ（'tshur phu）でもチョジェ・ランチュンパ（chos rje rang byung ba, 1284–1339）が金と銀を用いて筆写して建立した。[24] チャムパリン（byams pa gling）でもヤルギャプのポンチェン（yar rgyab dpon chen）・ゲニェンパ（dge bsnyen pa）が建立し、シ・クンパンパ（gzi kun spangs pa）が180帙ほど建立したのと、タグツェパ（stag rtse ba）も良い経堂と以前のカンギュル・テンギュルの上に〔加えて〕、後で手に入れたたくさんの原本を加えて建立した。その間に数限りない建立がなされた。これらのことは、チョムデンリグペーレルティの弟子である出家者ジャムペーヤンの力によって生じたのであり、さらにさかのぼるのならばゴク・ロツァワのおかげであり、カシミールの学者達のおかげであり、つまるところは諸仏のおかげということである。[20]

と書かれている。

ナルタン本カンギュルの原本についても、一切智者シトゥ・チューキジュンネー（si tu chos kyi 'byung gnas）がお書きになった『デルゲ版カンギュル目録（*sde dge bka' 'gyur dkar chag*）』には

賢者チョムレルの弟子であるジャムカパクシ[25]がモンゴルよりカンギュルを建立するためのたくさんの資材を献上した。それを使って『律本事』（D No. 1, Ka–Nga）の原本〔については〕、チム•チェンポ•ナムカータク（mchims nam mkha' grags）[26]が、善智識ギャの戒律保持者が生きておられる時に、善智識シンモチェパ・チャンチュプセンゲ（zhing mo che pa byang chub seng ge）が管理なさって、「律小事」（D No. 6, Tha–Da）12巻全てと「律上分」（D No. 7, Na–Pa）の12巻全てとその要約二つ全てをサムイェ（bsam yas）のチムプ（mchims phu）等ウィ・ツァンの経堂から探し、長老ダルマセンゲ（dharma seng ge）が律4部[21]を全て建立したものをラトェオルグー（la stod 'ol rgod）の経堂からナルタンの経堂に招請してそれを原本になさって建立した。他にもチュミクリンモ（chu mig ring mo）の経堂[22]とルールンショートク（rud klung shod grog）の経堂〔にあった〕律本事等とを校訂した。

20　Vol. I, pp. 409–412.

21　律本事（D No. 1, Ka–Nga）、律分別（D No. 3, Ca–Nya）、比丘尼律分別（D No. 5, Ta, Ka–Nga）律小事（D No. 6, Tha–Da）、律上分（D No. 7, Na–Pa）

経部の経典[23]の原本は、法王パクパ（1235-1280）の常用経典で『神と人の至高の飾り（*lha mi'i rgyan mchog*）』と称されたものと[24]、ツァンのチュミクリンモの経堂にあった経部の経典のうち至高の善智識タルチャル（'dar phyar）が建立した『経部タルチャルマ（*mdo mang dar phyar ma*）』と称されるものと、『ダンツァムプクチュンマ（*'brang mtshams phug chung ma*）』と称されるものと、『ガバルマ（*dga' 'bar ma*）』と称されるものと、パルナルタン（dpal snar thang）の経堂にあった至高の大学者チムの常用経典である『経部セルシュンマ（*mdo mang gser gzhung ma*）』と『チュクギェルマ（*phyug rgyal ma*）』と『ゴンサルマ（*dgon gsar ma*）』等と、他にもラマ・トゥパンツァバ（bla ma gru spang rtsa ba）の常用経典『経部・世界の飾り（*mdo mang 'dzam gling rgyan*）』と、ショクチュン（shog chung）の経堂にあった経部の経典62余りと、プンスムの経堂にあった経部の経典と、シャルのセルカン（zha lu gser khang）の経堂[25]にあった経部の経典の原本と、『モンダド（*smon da dho*）』と呼ばれるもの等、経部の経典で順番通りにきちんとそろっている経部の経典と照らし合わせたものである。

22　大王ンガクワンクンガ・ソナム（1597-？）がお書きになった『サキャの稀有なる一族の倉庫（*sa skya'i gdung rabs ngo mtshar bang mdzod*）』［民族出版社1986, p. 215, II. 6-15］には「火の雌の牛の年（1277）の正月にチンキム王が施主となって、ツァンのチュミクリンモ（chu mig rin mo）で大法輪を回した時（大法会を開催した時）、この偉大な人（チンキム）が僧侶７万余りにたくさんの供物を供えた。僧侶それぞれに黄金一ショ（zho）ずつ、毛皮３ナム（snam）ずつの布施をなさり、大法輪を回した。そしてその周りに集まった僧侶７万と、その他にも多くのテキストに通じた人たち数千と、普通の人達等数十万に対しても、全ての勝利者の〔進む〕一本の大乗の大道の菩提の至高の発心を授けた。」と書かれているようにナルタンの近くにあるこの寺で西暦1277年に仏で法王のパクパが僧侶7万を集めた法輪をなさったこの事件はチベットの歴史上チュミクリンモの法輪と呼ばれる。

23　D Nos. 94-359, Ka-Aḥ

24　『サキャの家系譜・稀有なる蔵（*sa skya'i gdung rabs ngo mtshar bang mdzod*）』［p. 123, ii. 12-14］には経・タントラ・般若等、金写の仏説200帙余りを建立なさったと述べられている。

25　西暦1002年にクシャン・タクパギェルツェン（sku zhang grags pa rgyal mtshan）が施主となってチェツン・シェーラプジュンネー（lce btsun shes rab 'byung gnas）が建てた。

般若十万頌（DNo. 8, Ka-Na.）に〔ついて述べる〕。ツェンポ（王）•チデソンツェン（khri lde srong btsan, 776-815）の時に建立されたラブムチェンモ（bla 'bum chen mo）、ティデツク（khri lde gstug）のラブムケポ（bla 'bum skya bo）、ジンヨン（mjing yon）のプクブム（spug 'bum）、ツァンマ（gtsang ma）のチェブム（bye 'bum）、ラルパチェン（ral pa can, 806-841）のトゥクブム（drug 'bum）、ナムデラ（gnam sde lha）のシャマルツェン（zhal mar can）、ダルマ（dar ma）のショクセルチェン（shog ser can）等のツェンポ•チソンデツェン（btsan po khri srong lde'u btsan, 742-797 ）の治世〔にあった〕般若十万頌が 6 部程あると称された赤と青の備忘録等から派生した経典と、民衆が建立した般若十万頌19部等と、それらから増えたものでとても多くある系統から欠落していなくて正しく書かれた原本等とを、ウパ・ロセル（dbus pa blo gsal）とソナムオセル（bsod nams 'od zer）訳師とギャンロン・チャンチュプブム（rgyang rong byang chub 'bum）等の多くの学者が校訂して正しく決定したものである。

秘密の十万タントラ部[26]の原本〔について述べる〕。ラマ•ジェツンチェンポ・タクパギェルツェン（bla ma rje btsun chen po grags pa rgyal mtshan ）御前と大ラマ・チューキギェルポ（bla ma chen po chos kyi rgyal po）がお作りになったタントラの目録と、大軌範師リグペーレルティ（rig pa'i ral gri）が編纂された目録『タントラを飾る花』等に基づいて、大本山である吉祥のサキャ寺の〔僧侶〕ギュブム（rgyud 'bum）とシャカの比丘であり大行者であるセルティンパ（gser sding pa）が校訂して順番を整えなさった。善智識ケーメートンシェー（skye med ston shes）が建立なさった十万タントラと吉祥のタルパリン（thar pa gling）の経堂[27]の善知識タルチャルが建立した十万タントラとラマ・トゥパンツァワ（bla ma gru spang rtsa ba）の本とオガプンスム（'od dga' spun gsum）の経堂の十万タントラ等、正しいタントラで数が多くて順番も整っているものである。

他にもそこに集まっていなかった原本も、しっかりした根拠に基づいて三考を加えて[(27)]正しく決定したもののみを模範になさって、吉祥のナルタン

26　D Nos. 360-1108, Ka-Wa, Ka-Ga, Śrī, E-Wam

27　プトンの師であるタルロ・ニマギェルツェン（thar lo nyi ma rgyal mtshan）が僧院長を務めていた。

の大経堂においてシャカの比丘ジャムペーヤンが建立して目録を作ったものがナルタン本カンギュルと呼ばれている。[28]

と書かれていることをまとめるならば、我々の吉祥ラマに等しいチム（mchims）一切智者ジャムペーヤン（'jam pa'i dbyangs）が、西暦1312から元の皇帝である仁宗・アユルバルワダ・ブヤントゥ（ci tsun e yur par pa ta bu yan thu, 在位1311-20年）の9年の治世の間にモンゴルに招かれて〔モンゴルに〕到着したことによって、現存するカンギュル・テンギュル全ての原本となるナルタン本カンギュル・テンギュルを建立することができた(28)。これは有雪の国チベットでカンギュル・テンギュルを一そろいで建立した最初である。

他にも忘れてはいけない事がある。チム・ジャムペーヤン（mchims 'jam pa'i dbyangs）がお書きになった『チムの倶舎論（*mchims mdzod*）(29)』はチベットで宗派を問わず用いられているアビダルマの教科書なので、私もこの教えの権威者であるジャムゴン・ニマギェルツェン（'jam mgon nyi ma rgyal mtshan）と尊者ラマのハキャブパ（lha skyabs pa）御前から、語句と意味と難解な部分全てについての詳しい注釈を3年間にわたって教えられた縁で、チム・ジャムペーヤンに対して本当の師のような親しんだ信仰を持ち続けている。そこから、チム・ナムカタク（mchims nam mkha' grags）とチム・ジャムペーヤンは同一人物なのかどうかという疑いがおこり、西暦1981年に書いた『倶舎についての概論と注釈・アビダルマの飾り(30)』[29]において、この二人は別人であると説明した。その後、西暦1992年に書いた『アビダルマ思想の発展についての研究・チムの倶舎論の美しい飾り[30]』ではお名前が違うだけで同一人物であるという立

28　*bde bar gshegs pa'i bka' gangs can gyi brdas drang pa'i phyi mo'i tshogs ji snyed pa par du bsgrub pa'i tshul las nye bar brtsams pa'i gtam bzang po blo ldan mos pa'i kuNDa yongs su kha phye ba'i zla 'od gzhon nu'i 'khri shing*. Collected Works of the great Ta'i si tu pa kun mkhyen Chos kyi 'byung gnas bstan pa'i nyin byed, Volume, 9, Published by sherab gyaltsen for Palpung sungrab nyamso khang, Sherab-ling Institute of Buddhist Studies P. O. Sansal, 176125, Dist. Kangra HP. India, 1990, Ta 203b6-4b6, pp. 408-410.

29　Khangkar Tshul khrims skal bzang, *Chos mngon pa mdzod kyi spyi bshad 'grel pa mNgon pa'i rgyan gyi rgyan*, Published by Western Tibetan Cultural Association, New Delhi, 1982, pp. 86-87.

場に立って説明をした。しかし、今また詳しく調べた結果、異なる人物であるという立場で説明をするのが正しいと判断できる。それについては『チムの倶舎論（*mchims mdzod*）』の奥書きに

> 『法の倶舎の注釈・アビダルマの飾り（*chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel pa mngon pa'i rgyan*）』という〔この書物〕は、仏滅後3500年経とうとしている時、所知をよく分類する比類なき智慧によってムニの教えを護り、慈悲と事業の良き豊かさによって有情たちを解脱させた人・すぐれたラマ・宝のごとき法王と、所知の天を知る輪が発展し、名声の光が全ての地方を覆うようになることで出家者や賢者達の頭を飾る宝石になり、有雪の国の大上座・チム（mchims）一切智者達のおみ足の汚れた埃のない場所を頭で受けて〔弟子となった私〕・多聞の人・シャカの比丘ジャムペーヤン（'jam pa'i dbyangs）が、吉祥備わるサキャ（sa skya）の大寺で〔著作に〕着手して、地の自在たる大王の宮殿チォントゥ（cong tu）の城で完成した。[31]

と書かれており、〔天（nam mkha'）と名声（snyan grags）の二文字にナムカタクの名前が隠されていることから〕チム・ナムカタクは自分の一番重要な師であることをはっきりとおっしゃっている。他にも『サキャの家系譜・稀有なる蔵（*sa skya'i gdung rabs ngo mtshar bang mdzod*）』［p. 173, l. 19.］には「ナルタンの管長チム・ナムカタクと」と述べられており、この尊者法王パクパの一番重要な師であることが述べられているのと『テプゴン』のナルタンの章〔la 章 ca〕には

> チム・ナムカータクが39年、キョトン・モンラムツルティム（skyo ston smon lam tshul khrims）が15年、ニマギェルツェン（nyi ma rgyal mtshan）が7年、セウバ・ツォンデュータグ（ze'u ba brtson 'grus grags）が12年、彼の弟タクパシェーラプ（grags pa shes rab）が12年、大戒師ロサンタクパ（blo bzang grags pa）[32] が40年……[33]

30　Khangkar Tshul khrims skal bzang, *The Development of Thought in the Abhidharma Literature*, Published by the Tibetan Buddhist Culuture Association, Minamida-cho 22-9, Jodo-ji, Sakyo-ku, Kyoto, Japan, 1992, p. 35.

31　Toh No. 6954, 429a3-6.

とチム・ナムカタクの後にチョムデンリクレルの師であるキョトンパがナルタンの管長を務めたと書かれていることからも示すことができる。それについてチム・ナムカタクの伝記をまとめるように求めるならば、歴史家であるチャハルの善知識ロサンツルティムの著作の『小文集（*gsung thor bu sna tshogs*）』に

> チム一切智者ナムカタクは馬の年（1210）にお生まれになった。ペルデント（dpal ldan gro）とサンギェゴムパ（sangs rgyas sgom pa）等に師事した。このお方は『倶舎論注（*mdzod Tika chen mo*）』と『アティーシャ詳伝（*jo bo'i rnam thar rgyas pa*）』と『至高の道程の注釈（*lam mchog gi 'grel pa*）』等を著された。鼠の年にお亡くなりになった。[34]

という確かな記述がある。

上述〔したチム・ナムカタク、チム・ジャンペーヤンの事業の〕後、プトン一切智者[(31)]は、御年33になられたラプジュン5周目の水の犬〔の年〕西暦1322年に『教法史・経典の蔵（*chos 'byung gsung rab rin po che'i mdzod*）』又の名を一般に『プトン仏教史（*bu stong chos 'byung*）』（Toh. No. 5197, Ya）と称される前代未聞の善説をお書きになったが、その最後にカンギュルとテンギュルの詳しい目録がある。その学恩を思いながら、ここに自説を述べる。プトン一切智者の著作に対して、これは正しい、これは正しくないとつぶさに是非を申し上げる自信はないが、時には私のような後学のものをためすため、あえて間違ったことをお書きになっているではと思って〔プトンに〕修行の供養を奉げる。例えば『プトンの仏教史』には

> 漢訳経典より〔チベット語に〕重訳した『入楞伽経』11巻（D No. 107, Ca?[(32)]）、漢訳経典より訳した『楞伽阿跋多羅宝経』8巻（D No. 108, Ca）……。[35]

と書かれている。この説に従うのは正しいのだろうか？　デルゲ版の『入楞伽

32　ツォンカパの師であるチョジェ・トントゥプリンチェン（chos rje don 'grub rin chen）の師にあたる。

33　p. 344, l. 15.

34　Nya, f. 24b5–6, p. 110.

35　Ya 148a6–7.

経』の翻訳の奥書に

> 『入楞伽経』はこれで完結する。世尊の教流であるグー•チュートゥプ（'gos chos grub）が中国の本から訳して正しく決定した。[36]

とあり、『楞伽阿跋多羅宝経』（D No. 108, Ca）の翻訳の奥書に

> 『楞伽阿跋多羅宝経』はこれで完結する。吉祥聖神ツェンポ（dpal lha btsan po）の命で中国の軌範師であるウェンヒー（wen hwi, 円暉）がお作りになった注釈と照らし合わせてから、訳師であり比丘であるグー・チュートゥプが訳して校訂した。[37]

と、楞伽経の訳二つとも漢訳経典から重訳したように述べられている。しかし前者の『入楞伽経』というお名前のあるこのチベット語訳はサンスクリット経典から直接訳した事は疑いがない。その理由は、一つ目はこの翻訳と現存する『入楞伽経』のサンスクリットの経典二つは水に水を入れるようにぴったりと合う事、二つ目は一切智シトゥ•チューキジュンネー（si tu chos kyi 'byung gnas）がお書きになった『デルゲ版カンギュルの目録（*sde dge bka' 'gyur dkar chag*）』に

> 『入楞伽経』 9 巻28章はサンスクリットより訳されたと一般に言われていても訳した人は明らかでない。『楞伽阿跋多羅宝経』8 巻は中国の軌範師であるウェンヒーがお書きになった注釈と照らし合わせてから、訳師グー・チュートゥプが中国の本から訳した。[38]

と、『入楞伽経』9 巻はサンスクリットから訳したが訳師は不明であると述べてられている。このように現存するサンスクリットからの翻訳は 9 巻あるが、前述のプトンによる12巻の説とはやや異なる。三つ目は『デンカルマ目録（*ldan dkar ma dkar chag*）』には「『楞伽阿跋多羅宝経』の章2400頌、8 巻[39]」とあるように前伝期に中国より訳した『楞伽経』は一つしか述べられていない点である。

36　D No. 107, Ca 191b7.

37　284b6–7.

38　Ta216b5–6

39　Jo 300a6

もし二つとも漢語から訳したものとするなら、翻訳の奥書では同じ訳師を挙げているので、片方もきちんと挙げるべきところを挙げていないことからも明らかである。さらに新しい善説の喜びの多くの宴を献じようとしても、これだけで十分であろう。

ここまではカンギュルとテンギュルを一緒に建立するやり方が盛んだったのだが、以後の時代は別々に建立されている。さて〔大蔵経への賛歌をささげよう〕

世尊そのものである理論の剣と
チムの師の文殊と一体の人
数え切れない太陽の大事業の加持で
カンギュル・テンギュルの蓮華の園が広がった催しに対して
東西の学者が数え切れない蜂の集まり〔が蓮華の花に集まる〕ように
自然に集まったこの事は素晴らしい。

3.　カンギュルの開版事業について

3.1　ツェルパ（tshal ba）本カンギュルとチョンギェー（'phyong rgyas）本カンギュル

ラプジュン5周目の水の豚の年、西暦1323年からツェルパのクンガ・ドルジ（kun dga' rdo rje, 1309-1364）[33]がチベットの政治を支配して、その間ナルタンのカンギュルを主な原本にして金銀をまぜたインクで筆写したカンギュル一そろいを建立した時に、プトン一切智者を主校訂者として招いた。〔そのように建立された〕カンギュルはウィのツェル・クンタン（tshal gung thang）経堂[40]に安置されたためツェルパ本カンギュルと呼ばれる。テプテルカルポと呼ばれている目録はツェルパのクンガ・ドルジェ御自身がお書きになった。

そのカンギュルを主な原本にして、ションヌ•シャキャギェルツェン（gzhon

40　四大カギュ派の一つであるツェルパ・カギュ（tshal ba bka' rgyud）の本山で、これはキチュ（skyid chu）の南方にあるラサから10キロ余りのところにある。ツェルのクンタンというのはツェルとクンタン二つを合わせた名前であって、西暦1175年にクンタンのラマであるシャン（zhang）のツォントゥタクパ（brtson 'grus gragspa）が建立なさった。セラ•デプン•ガンデンの三大寺院ができる前のウィの六大本山の一つである。

nu sh'akya rgyal mtshan）とグーロ・ションヌペル（'gos lo gzhon nu dpal, 1392–1482）、シャマルパ 4 世御前チューキタクパ（chos kyi grags pa, 1453–1524）、カルマパ 7 世チュータクギャムツォ（chos grags rgya mtsho, 1454–1506）、カルマパのミキョドルジェ（mi bskyod rdo rje, 1507–1554）[34] 等たくさんの学者が校訂して注をおつけになったチベットで匹敵するもののない原本は、ロカ（lho kha）のチョンギェーにあるチンパルタクツェ（'phyong rgyas phying dbar stag rtse）宮殿に安置されたのでチョンギェー本カンギュルとして知られる。その後、ツェルでテンギュルも建立された。

それらの事業によって尊者ツォンカパの中に善説を書くという大いなるお心の利益が生じた。そのことは、ケードゥプジェ（mkhas grub rje）がお書きになった尊者ツォンカパ（1357–1419）の伝記である『信仰入門（*dad pa'i 'jug ngogs*）』（Toh. No. 5250）に

> キショ（skyid shod）にいらっしゃり、ツェル（tshal）におすまいになって、仏説と論書のチベット語訳全てを詳しくご理解なさった。経典全ての意味を考察するたくさんの方法がお心に生じた。『現観荘厳論の注釈を備えた大注釈』（Toh. No. 5412, tsa–tsha）を御自身がお書きになさった[41]

と述べていることからも証明される。

3.2　永楽（g-yung los）版カンギュル[35]

ラブジュン七周目の鉄の虎の年、西暦1410年に明の永楽帝によって南京でチベット語訳のカンギュル一セットの木版が建立された。チベット語訳カンギュル一セットが木版で建立された最初である。永楽版カンギュル一セットはチャムチェンチョジェ・シャキャイェシェー（byams chen chos rje　sh'akya ye shes, 1354–1435）[36] によって〔チベットに〕招請され、セラ寺に[42]安置された[37]。私ツルティム・ケサンもそのカンギュルにお目にかかる機会を得たが、不幸にも何帙（pod）かは文化大革命の時に失われて存在しない。失われる以前の永楽版カン

41　ka20a2–4.

42　西暦1419年にチャムチェンチョジェ（byams chen chos rje）が建立なさった。その時にシンセーパ？（shing se ba）の茎の柵が囲んでいるようなので、セラと言われた。

ギュルの歴史については、大賢者プルブチョク・ンガクワンチャムパ（phur bu lcog ngag dbang byams pa）がお書きになった『四大寺院と上下密院の発展する歴史・白い蓮華の数珠（*grwa sa chen po bzhi dang rgyud pa stod smad chags tshul pad dkar 'phreng ba*）』に

> 大明の皇帝により比類なきラマとして力を授けられて、正法の勝利者・その智慧を全てに及ぼして国を守る人・教えを盛んになさる善者・大慈悲の法王というお名前と、勅書と供物など考えられないほどの供養がなされた。中国ではじめて彫られたカンギュルの木版の初刷で、皇帝の印(38)が押された朱版で、最初のページは金写がされている素晴らしいカンギュルをお持ちになってウィにいらっしゃった。[43]

と述べられている。

その版本はチベットの学者達の良い手本になってチベットでも版木を彫る技術が発展した。それについてケードゥプジェ（mkhas grub rje）がお書きになった尊者ツォンカパの伝記である『信仰入門（*dad pa'i 'jug ngogs*）』に

> 『一切タントラ王、吉祥秘密集の広釈たる『燈作明』の句義を如実に解明する細注による復注』（Toh. No. 5282, nga 54a4-5）を木版に彫るのを初めて、障害無く豚の年の（1419）内にきちんと完成させた[44]

とある。特に尊者ツォンカパが浄土に行かれて７年たった西暦1426年に、ギェルツァプ・ダルマリンチェン（rgyal tshab dar ma rin chen, 1364-1432）とトクデンジャムペルギャムツォ（rtog s ldan 'jam dpal rgya mtsho, 1356-1428）等が頼んで、コンカル（gong dkar）のネウ（sne 'u）のゾンプンであるナムカサンポ（nam mkha' bzang po）等が尊者ツォンカパの全集を全て印刷なさって、その版木は1959年までにガンデン寺のスンジュグ（zung 'jug）カムツェンに安置された。

ガンデン古版のウラ(39)は頭とお体のバランスが良く、お体の肩幅は広く、ウェ

43　be31b1-3, p. 443, *Collected Works*（*gsung 'bum*）*of Phur-bu-lcog Ngag-dbang-byams pa*, Reproduced from a set of tracings from prints from the Phur-bu-lcog, Hermitage blocks by Ngawang sopa, Vol. IV, New Delhi, 1974.

44　Toh. ka54a4-5.

ストは細く、顔の絵だけはよくないが、書体は手書きと間違う程で、版木を彫る技術はとても良いものである。ガンデン古版は霊験がとてもあらたかなので、昔、その版木はゲルク派の大きな寺院全てに安置されていた。大寺院ガムリン（ngam ring）寺に安置されていた『菩提道次第小論（*lam rim 'bring po*）』の一帙については、私の根本ラマであるチョジェ・ペルデンパチェンポ（chos rje dpal ldan pa chen po）が、私ツルティム・ケサンに対してこの本の初めから講義して、〔学識が〕深くて広い解説をなさって、その後に座右の経典として私に下さった。ラマのお考えを完全なものにするため、日本でこのテキストの講義と翻訳も行った。

3.3　ギャンツェ（rgyal rtse）のテンパンマ（them spang ma）本

その後、ラプチュン七周目の鉄の豚の年、西暦1431年にギャンツェのデシーであるラプテンクンサンパクパ（rab brten kun bzang 'phags pa）[40]がナルタン本カンギュルを手本になさって、金写のカンギュル一そろいを建立した。それをギャンツェのテンパンマ本と言う。その目録はロチェン・トゥジェペル（lo chen thugs rje dpal）がお書きになった。

3.4　万暦（dben lis）版カンギュル

その後、西暦1605年に北京で、明の万暦帝がカンギュル一セットを建立した[41]。それを万暦版カンギュルという。それは永楽版カンギュルを原本として、それに少々の校正を行ったものである。何人かの学者がそれを北京版カンギュルというのは学術的に正しくない。北京版カンギュルについては後述する。それと同時に42帙の他の文献を開版した。

3.5　リタン（li thang）版カンギュル

ジャン（'jang）[42]王ソナムラプテン（bsod nams rab brtan）がカンギュル一そろいを版木になさるため、シャマルパ6世チューキワンチュク（chos kyi dbang phyug）[43]がツァリ（tsa ri）のツォカル（mtsho dkar）にいらっしゃる時、原本としてツェルパ本カンギュルをお借りして、西暦1608年から西暦1621年にかけて108帙を版木にして完成した。これがジャンサタム（'jang sa tham）版カンギュルと一般には呼ばれるものである。部分的ではなくまとまった形で版木にされ

たカンギュルとしてはチベット最初のものである。(44)

時代の流れで、モンゴル人のグシ護教法王(gu shri bstan 'dzin chos rgyal, 1582–1654)(45)の年長の息子であるツェリン・エルトゥチ（tshe ring yel du chi）(46)の子であるカンド・ロサンテンキョン（mkha' 'gro blo bzang bstan skyong）(47)がチベットとモンゴルの軍隊を率いてジャン・サタム王の所に攻め込んで、カンギュルの版木を招請して、リタンの大寺院トゥプチェンチャムパリン（thub chen byams pa gling）に安置した。それによりリタン朱版と呼ばれた。この事件について、ウェルマン・コンチョクギェルツェン（dbal mang dkon mchog rgyal mtshan）がお書きになった『中国、チベット、ホル（モンゴル）、ソグ（オイラト）の歴史略説・初心者のための入門書（rgya bod hor sog gi lo rgyus nyung ngur brjod pa byis pa 'jug pa'i 'bab stegs）(48)』に

> ツェリンエルトゥチの子であるカンド・ロサンテンキョンはとても勇気があり、マカム（smra khams）の方に兵を送ってドカム六高地全てと東方のタルツェド（dar rtse mdo）までを支配した。ジャンサタム王の所に軍隊を送って、シャマルパ 6 世が善住の儀式をなさったカンギュルの版木を持ってきてリタンに安置した。[45]

と述べられている。

その原本については、『ジャンサタムのカンギュルの目録』または『全チベット語仏説の目録・ムニを喜ばせるもの（*bde bar gshegs pa'i bka' gangs can gyi brdas 'dren pa ji snyed pa'i phyi mo par gyi dkar chag thub pa dgyes byed*）』に

> カンギュルの原本はたくさんあるが、全ての中でも最上のものは、時と主の点から名づけたツェルパ本カンギュルとして知られるものである。これについては、ションヌ・シャキャギェルツェン（gzhon nu sh'akya rgyal mtshan）と勝利者の主である歴代のカルマ派シャマルパとシャナグパ達と他にも素晴らしい聖人達による校訂と注釈と研究がなされ、現在このチベットにおいて比べるもののないほど素晴らしいものであって、この数帙がある状況に関しては……[46]

45　Nga 30a1–2, p. 358.

46　1a4–6.

と述べられており、また一切智者・シトゥ・チョーキジュンネー（kun mkyen si tu chos kyi 'byung gnas）が著された『デルゲ版カンギュル目録（*sde dge bka 'gyur dkar chag*）』には

> 釈迦の比丘であるジャンペーヤン（'jam pa'i dbyangs）が建立なさって目録を書いたナルタン本カンギュルと称されるもの。それを主な原本にしてツェルパの司徒ゲペーロドー（tshal pa si tu dge ba'i blo gros）がツェル・クンタン（tshal gung thang）の経堂に建立したカンギュルはツェルパ本カンギュルと称される。そのツェルパ本カンギュルはションヌ・シャキャギェルツェンとカルマパのチョータクギャムツォ（chos grags rgya mtsho）、クンケン・ミキョドルジェ（kun mkhyen mi bskyod rdo rje）、シャマルパのチョーキタクパ（chos kyi grags pa）とグーロ・ションヌペル（'gos lo gzhon nu dpal）等のたくさんの学者が良く研究して校正なさって注釈をして、チベットの国における比類ない典拠である正しい原本としてチンパルタクツェ宮殿にある。
>
> 後にジャンの国の王であるカルマ・ミパム・ソナムラプテン（karma mi pham bsod nams rab brtan）が〔そのツェルパ本カンギュルを〕福の大きな力で招請して主な原本として、タントラ部についてはタクルン（stag lung）の密教全集とも照らし合わせた。そして一切智者であるシャマルパ6世が主に校訂なさってそれを版木にした。時勢により今はリタンのチャムチェン・ナムパル・ギェルベー寺（byams chen rnam par rgyal ba'i chos sde）にある。[47]

と述べられていて、その原本をジャンサタムがどのように招来したかということについては、タイシトゥ・チョーキジュンネー（t'a'i si tu chos kyi 'byung gnas）の全集のナ（na pa）帙にある『行の伝統を守るカルマ派の修行者の伝記・たくさんの宝石である月のような水晶の数珠（*sgrub brgyud karma kaM tshang brgyud pa rin po che'i rnam par thar pa rab 'byams nor bu zla ba chu shel gyi phreng ba*）』のシャマルパ6世の伝記の箇所に

> 〔サタム王から〕カンギュルの版木を建立する原本であるツェルパ本カ

47　Ta, 204b-5a3, pp. 410-11.

ンギュルの校訂本を借りなければならないことを書いた手紙が来たのでその返事を書いて送った……メルト（mal gro）のカンカル（gangs dkar）とタンサク（thang sag）に行かれて中観の概論を〔講義〕なさった。[48]

と述べられている。しかし教法に対する教えの障害によって、リタン版は西暦1908年に中国の軍隊が火を放って全て失われたので、一つからたくさんへ火が広がる大偉業〔であるカンギュルの物語〕はここでひとまず終わった。(49)

しかし幸運にもリタン版のカンギュルは全てではないがいくらかが残っており、インドのオリッサ（orissa）の亡命チベット人キャンプにあったものを成田山仏教研究所（The Naritasan Institute for Buddhist Studies）が写真版にした。欠けた分を補うために我々はチベットに行って、デプン大寺でリタン版カンギュルが二セットあったので、写真にとって欠けている部分を補ったが、2，3葉補うことができなかった。今枝由郎氏によって、今までの国内外の学者達がお書きになったチベットのカンギュルと目録についての詳細な序文を付したジャン・サタム版カンギュル目録で左側に漢数字がつけられている22葉からなる版本と目録の歴史を述べた左側に漢数字がつけられている36葉からなる版本の写真版が出版された。[49]

注目するべきことに、歴史家のタシツェリン（bkra shis tshe ring）氏が書いたラギャ版カンギュルの目録を出版する序文に

「『善逝の教え・チベット語経典の編纂について書いたもの・信仰から現れた宝石の鑑（*gde bar gshegs pa'i bka' gangs can gyi brdas 'dren pa ji snyed pa'i phyi mo par gyi tshogs su 'khod pa'i byung ba gsal bar brjod pa legs byas*

48　Na133b6-134a5 *Collected Works of the great Ta'i si tu pa kun mkhyen Chos kyi 'byung gnas bstan pa'i nyin byed*, Volume, 12, Published by Sherab gyaltsen for Palpung sung rab nyamso khang, Sherab-ling Institute of Buddhist Studies. O. Sansal, 176125, Dist. Kangra HP. India, 1990, pp. 266-267.

49　Y. Imaeda, *Catalogue du Kanjur tibétain de l'édition de 'jang sa-tham, Premiere partie: Edition en facsimiliē avec introduction*（Biliographia Philologica Buddhica, Series Maior II A), The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1982, Seconde partie: Texte en translitteration（Biliographia Philologica Buddhica, Series Maio II B), The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1984.

kyi dad pa'i gzugs kun nas snang ba nor bu rin po che'i me long）』〔この本は〕シャマルパ6世ガルワンチョーキワンチュク御前（gar dbang chos kyi dbang phyug zhabs）が1614年にお書きになった。この本は私がチベットの図書館の調査のためカリンポン、ダージリン、ガントグの三箇所に行った時、1976年に人主バニャク・アティン（'ba' nyag a thing[50]）の個人図書館にあった。『ジャン•サタムの領地で建立されて、リタンの大寺に安置している仏の教えの目録（*'jang sa tham rgyal khab tu bzhengs shing li thang dgon chen du bzhugs pa'i rgyal ba'i bka' rin po che'i dkar chag*）』という表題で、美しいウメの古書体で、短いペチャ50葉のものはリタン朱版に関する情報と関係する文献で、私がみたはじめてのものである。

と述べられている[50]。しかし詳しく検討すると、シャマルパ6世はジャン・サタム版カンギュルの目録の中の歴史を述べた部分をお書きになったが、目録自体を作成されたのではない。それについては『全チベット語仏説の目録・ムニを喜ばせるもの（*bde bar gshegs pa'i bka' gangs can gyi brdas 'dren pa ji snyed pa'i phyi mo par gyi dkar chag thub pa dgyes byed*）』という表題であるジャン・サタム版カンギュルの目録の奥書には

『チベット語カンギュル大蔵経の目録・ムニがお喜びになるもの』という本はこれで完結する。スヴァスティー。チベットの教えの飾り・欠けることなく集めた宝の数珠・不空の縄に〔譬えられる〕善言、それは太鼓の音色のようにその名前がとどろくツェルパ本カンギュル、それに収録されているあらゆるものを述べるこの善説を、ツクラペルゲー（gtsug lag 'phel rgyas）寺の僧侶で、法を説く人•正しい行いを成就することをとても喜ぶ人という名前を持つ人間が編纂した。項目の欠落と重複の間違いをなおす校訂を行なう素晴らしい礎となる仕事と版木にする仕事の責任者となった〔ジャンの〕王族のカルマペルジョル（karma dpal 'byor）が、鉄の鳥の年（1621）の八月の吉日に達成した吉祥によって……[51]不滅の栄光を行ぜんこ

50　*A History and brief survey of the contents of the A mDo Rwa rGya redaction of the Tibetan bKa' 'gyur*, Library of Tibetan Work and Archives, Dharamsala, 1983, XIX.

51　20b1-6.

とを！帙の総数について述べる。律と十万般若の二つは13帙と16帙に分けて収めて29帙、つぎに二万五千頌般若４帙を加えて33帙、一万頌般若と一万八千頌般若を合わせた４帙を加えて37帙、八千頌般若１帙を加えて38帙、その他諸々の般若経の新訳をまとめた１帙〔を加えて39帙〕、経部を32帙にまとめたものを加えて71帙、華厳と宝積を12帙にまとめたものを加えて83帙、10万タントラを24帙にまとめたものを加えて107帙、時輪タントラを１帙にまとめたものを加えて108帙ある。[52]

と述べられている。ともかく108帙と1006章あるジャン•サタム版カンギュルの目録は、〔正確な名前は不明だが〕ツクラペルゲー（gtsug lag ’phel rgyas）寺の僧侶で、法を説く人・正しい行いを成就することをとても喜ぶ人という名前を持つ人物が編纂した。

一方、『善逝の教え・チベット語経典の編纂について書いたもの・信仰から現れた宝石の鑑』はシャマルパ６世ガルワンチョーキワンチュク御前（1584–1630）が西暦1614年にお書きになったものである。これは目録が作られた経緯を述べたものであって目録ではない。それについてはこの本の奥書に

ジャン・サタム大法王・カルマ・ミパム・ツェワンソナムラプテンという人が善逝のカンギュル全ての法の原本を全て建立した経緯を述べたこの本は……ガルワンチョーキワンチュク、〔またの名前を〕喜金剛の事を全てに達成するもの・あらゆる方向から特に勝利するものという人が……[53]

とあり、木の雄の虎（1614）の年に書いたと述べられており、同様に善住の儀式もシャマルパ６世がなさったことも、『行の伝統を守るカルマ派の修行者の伝記・たくさんの宝石である月のような水晶の数珠（*sgrub brgyud karma kaM tshang brgyud pa rin po che’i rnam par thar pa rab ’byams nor bu zla ba chu shel gyi phreng ba*）』には

力がインドラに匹敵するジャン・サタム王がいらっしゃって、次の日からカンギュルの版木を善住する準備をした。翌日から本格的に吉祥を伴う

52　21a5–8.

53　35b2–6.

善住の儀式をなさった。[54]

と述べられている。

3.6　北京（pe cin）版カンギュル

その後、清の皇帝である康熙帝（チベット語で幸福王 bde skyid rgyal po）が、西暦1692年に北京でカンギュルを106帙にして版木にした。これを北京版という。その後、西暦1700年に北京で、それに一帙付け加えて版木にした。そして間違っているところを彫り直して西暦1717年から20年の間に間違っているところを彫り直して再び版木にした。

大谷大学図書館にある著名な北京版は西暦1717年から20年の間に作られた版木である。その後、清の皇帝乾隆帝がその間違いを彫り直して西暦1737年に北京で再版した。その一部がフランスの首都パリにある国立国会図書館に保存されている。大谷大学が西暦1930年から32年にかけて北京版、デルゲ版、漢訳の大正大蔵経のカンギュルを校勘した北京版カンギュルの勘同目録も出版した。[55]

版木は西暦1900年に外国軍が侵略した時に壊されたので、一つからたくさんへ火が広がる大偉業〔の物語〕はここでひとまず終わった。幸運にも西暦1955年から58年にかけて大谷大学が保存していた原本を印刷して45冊にしたものを鈴木学術財団（Suzuki Research Foundation）が出版した。

3.7　チョネ（co ne）版カンギュル

『チョネのカンギュルの目録についての解説（*co ne'i bka' 'gyur rin po che'i dkar chag gsal ba'i me long*）』には

> 持教法王マクソルゴンポが教えと衆生のために利益することをお考えになって、パルパ（'phar ba）という名の鉄の雌の牛の年（1721）のホル月 6 月の上旬の良き日に、カンギュルを版木にすることを開始して、ガル('gal)という鉄の雌の豚の年(1731)のホル月上旬の 4 月の節日(51)に、版木が完成し

54　Na 138a5-6.

55　The Otani Daigaku Library, *A Comparative Analytical Catalogue of the Kanjur Divison of the Tibetan Tripitaka*, Kept in the Otani University Library, Kyoto, Japan, Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, 1930-1932.

て事を成就した[56]

と述べられているようにアムドのチョネの王マクソルゴンポ（dmag zor mgon po, 1686-?[52]）が施主をなさって、リタン版と永楽版とウィの正しい写本三つを原本にして、西暦1721年に着手して西暦1731年に全部で107帙を版木に建立してチョネ大寺[53]に献じた。チョネ版カンギュルと一般に呼ばれる。

上述のチョネ版カンギュルの目録をチョネの尊者タクパシェードゥプ（grags pa bshad sgrub[54]）がお書きになったことは後書きのリストに述べられている。

しかし教えの障害の関係で、西暦1929年にチョネの近くのイスラム教徒とチョネのチベット人の間で戦争が起きた時にイスラム教徒がチョネ版カンギュルの版木を焼いてしまい、一つからたくさんへ火が広がる大偉業〔であるカンギュルの物語〕はここでひとまず終わった。幸運にもチョネ版カンギュルとテンギュル一セットはアメリカの首都ワシントンの国立国会図書館（Library of Congress）にある。同様に日本の首都東京にある東洋文庫にもカンギュル１セットがある。

3.8　ナルタン（snar thang）版カンギュル

先述のカンギュルと大体同じ頃に、ダライラマ６世ツァンヤンギャムツォ（tshangs dbyangs rgya mtsho）がウィでカンギュルを一セット新しく建立する命令を下した。七年ほどの間に、般若経部28帙ほど作っただけで、その途中に仏の事業に悪縁が起きたので、完成せずに終わった[55]。

その後、ラサン・カン（lha bzang khang[56]）、タクツェ・ラギェルラプテン（stag rtse lha rgyal rab brtan[57]）、ダイチンバートル・ソナムギェルポ（ta'i ching ba thur bsod nams rgyal po[58]）等が残りの仕事を引き継いだが、最後まで完成しなかった。そして、人主ポラネー・ソナムトプギェー（mi dbang pho lha nas bsod nams stobs rgyas[59]）が、尽きることの無い法の施しの大門を開くために、西暦1730年に前の残りを引き継ぐ作業に着手して、ラトゥ（la stod）のシェルカル（shel dkar）印経院[57]でツェルパ本カンギュルを原本にして、西暦1731年に版木を新しく作っ

56　5a8-b1.

57　この印刷所はシェルカル（shel dkar）寺の南に一部だけ残っているが、1959年の時点では版木を彫る事はしていなかった。

た。目録を入れて101帙、それに補充の２帙を加え、全部完成してパンチェンラマ・ロサンイェシェー（blo bzang ye shes, 1663–1737）に版木を献じて、吉祥たるナルタンの経堂に安置したので、ナルタン版カンギュルと呼ばれる。

その目録はオルカ・レルン・シェーペードルジェ・ロサンティンレー（'ol ka sle lung bzhad pa'i rdo rje blo bzang 'phrin las, 1697–？）がお書きになった。それについて確かな根拠に基づいて解説する。ドカル・シャブドゥン・ツェリンワンギェル（mdo mkhar zhabs drung tshe ring dbang rgyal）が西暦1733年にお書きになった『吉祥たる人王の伝記。世間全てに喜ばれる話（*dpal mi'i dbang po'i rtogs pa brjod pa 'jig rten kun tu dga' ba'i gtam*）』には

> 一切智者であるロサンリンチェンツァンヤンギャムツォ（blo bzang rin chen tshangs dbyangs rgya mtsho, 1683–1706）様の発心の偉大さによって般若部を主とする28帙程を有情達の福の客として呼ぶことができても（版木にすることができても）、完成するまでの七年間に工人と民衆はいささか疲れ、ダライラマの持つ大きな蔵の物資も使い尽くしたので（予算も使い果たしたので）、最後まで完成させる機会を得ることはできなかった。
>
> そのすぐ後にチベットの主であるラサン・カンとタグナムパルツェパ（stag rnam par rtse ba）の領主と勇気あるダイチンバートル達も、残った仕事を全力で達成する誓願を立てようとしたが、怠惰という盗賊が善の財産を盗んだので、１帙も作れず……[58]
>
> 詳しく知りたいと願うものたちがいたのなら、『三有の唯一の荘厳・神通力の馬車の目録・稀有海の鍵』という本で、持明海・自在者・尊者シェーペードルジェが〔大蔵経の中の経典の〕配列を詳しく決めているので、それに〔基づいて〕理解すべし。[59]

と述べており、原本についてもロンドル・ンガクワンロサン（klong rdol ngag dbang blo bzang, 1719–1795）の『カンギュル全ての読授の聴聞録（*bka' 'gyur yongs rdzogs kyi lung thob pa'i gsan yig*）』に

> ツェルパの万戸長クンガ・ドルジェ、又の御名をゲペーロドー（dge ba'i blo

58　四川民族出版本　pp. 735, l. 19–736, l. 9

59　同　p. 746, l. 1

gros)が校訂をなさったツェルパ本カンギュルと呼ばれるもの、後にツァンのナルタンで開版された101帙の中にある読授の伝統のある経巻96帙[60]

と書かれている。残念なことに、文化大革命という前代未聞の災難の時に失われて、一つからたくさんへ広がる大偉業〔であるカンギュルの物語〕はここでひとまず終わった。

ここで説明しておくべきことは、デルゲ版カンギュル•テンギュル〔の建立〕が先に始まったにも関わらずナルタン版カンギュル・テンギュルを先に解説した理由である。それはナルタン版カンギュル・テンギュルが〔デルゲ版カンギュル・テンギュルの〕前にできたからである。それについて大学者トゥンカルリンポチェの『チベットの古書籍の開版に関する幾つかの問題（*bod yig dpe rnying par skrun dang 'brel ba'i gnad don 'ga' zhig*)』には

ポラ・ソナムトプギェーがナルタンのカンギュル・テンギュルを開版した。そして、デルゲ王テンパツェリン（bstan pa tshe ring）父子の時、デルゲ版カンギュル・テンギュルを開版した。二つの間には数年の差があるだけでほぼ同時期である。

ナルタン版テンギュルは西暦1730年の秋に着手して、西暦1732年のチベット暦の正月中に完成した。その間は１年と６ヶ月しか経っていない。デルゲのカンギュルはナルタン版カンギュルを開版する〔事業〕の１年前にはじめられたが、完成したのはナルタン版カンギュルの１年後である。

同じように〔テンギュルに関してのべると〕、ナルタン版テンギュルは西暦1741年のチベット暦３月中に始まって西暦1742年チベット暦10月のツォンカパの命日[61]に終わった。その間の仕事の期間は１年と７ヶ月と25日である。デルゲ版テンギュルはナルタン版テンギュルを開版する作業が始まる３年と11ヶ月前に作業が始まったが、終わったのはナルタン版テンギュル

60　ロンドル•ンガクワンロサン全集（*klong rdol ngag dbang blo bzang gsung 'bum*）西蔵自治区蔵文古籍出版社（bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang）　Dza Vol. II, 1991, p. 282, l. 5

61　チベット暦10月25日は尊者ツォンカパが涅槃にいらっしゃった日で、その記念の供養として、全ての寺院や村や家でともし火をつけて祈願を行う記念〔の日である〕。

より１年と６ヶ月後である。デルゲ版テンギュルは合計して５年と６ヶ月たってやっと作業が完了したのである。

ナルタン版カンギュル・テンギュルとデルゲ版カンギュル・テンギュル、この二つは開版を行った人たちの誠心誠意の志について全く優劣は無い。しかし経済力の点では、ポラネーはチベット全ての統治者であるが、片やデルゲ王はチベット地方政府の支配下にある一地域の小国の力しか持っていない[62]。

と述べられている。

3.9　デルゲ（sde dge）版カンギュル[60]

上述のものと時を同じくしてデルゲの法王テンパツェリン（bstan pa tshe ring, 1678-1738[61]）が施主をなさって、西暦1729年に着手して西暦1733年に103帙を建立なさって、デルゲ大寺ルントゥプテン（lhun grub steng）寺の印経院であるチョエゾチェンモ（chos mdzodchen mo）館[62]に安置した。それはデルゲ版カンギュルとして知られるものである。その原本は一切智者シトゥ・チョーキジュンネー（si tu chos kyi 'byung gnas）がお書きになった『デルゲ版カンギュル目録（*sde dge bka' 'gyur dkar chag*）』に

> 時勢によって今はリタンのチャムチェン・ナムパル・ギェルベー寺（byams chen rnam par rgyal ba'i chos sde）寺にあるカンギュルの版本[63]を原本として、それに加えてアニェン（a gnyen）パクシの本尊ともいえる〔とても大事にしている〕大変誤字の無いカンギュルと、他にも正しい根拠に基づいたいくらかの古書籍と校勘して、学者であり持戒者であるタシーワンチュク（bkra shis dbang phyug）が文章の細かい所を数箇所校訂なさった。またギャンツェ法王がナルタン本カンギュルを原本にして〔テンパンマ本を〕建立した時、濁世（近年）の一切智者プトン・リンポチェが三考をして決定して校訂した目録も付した[63]。
>
> それ（ナルタン本）を原本にした系統で、至高の尊者・世自在観音・人の

62　『トゥンカル・ロサンチンレー著作集（*dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung rtsom phyogs bsgrigs*）』中国蔵学出版社（krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang）1997, pp. 412, l. 16-413, l. 13

偽りを握る人・ンガクワンロサンギャムツォ（ngag dbang blo bzang rgya mtsho）御前の御命令通りに、地上の梵天であるソナムラプテン[64]が吉祥であるタンポチェ（thang po che[65]）の経堂で建立なさった黒文字でとてもきれいに写されたカンギュルで、大チベットの衆生に福徳をよく増進するためと、完全な原本によって経典の中の間違って分別された汚れを清めるために、カム（mdo stod）のロゾン（lho rdzong）の宮殿に安置させたものを招請して、それと比べて、頭脳明晰な学者何人かの大きな努力によって改めなくてはならない所を改めて、正しいものにした。それに加えて私（シトゥ）自身も人王（テンパツェリン）から金の塊のように重い厳命を賜ったので、鉄の犬の年（1730年）の2月[66]の上弦の最初の勝月（3日）から着手して、また校正の責任を負ったのである。

それについては一般に、ジャン版カンギュルは多くの聖人による分析や研究が完全な事は前述した通りなので、原本としたのだが、木版にした時、一切智者チューキワンチュク（chos kyi dbang phyug, シャマルパ6世）が順番を校訂できなかったのと、注意すべきところが多いので、管理者達の調べが行き届かず、ページの前後が混乱し、文章の増減が少し生じたことなどの欠点がいくらか見られる。〔それを〕ロゾンのカンギュルによって正しく直した。原本には収録されていないが〔学問の〕お手本となるべきいくらかの顕密経典でロゾンのカンギュルとは別のものを得て補充した。『律小事』（D. No. 6）等確実にページが抜けているところはいくつかの注釈と合わ

63　トゥンカル・リンポチェの『チベットの目録がどのようにしてできたのかを述べた歴史（*dung dkar rin po che'i bod du dkar chag ji ltar byung ba'i lo rgyus*）』には「一部の学者は、ギャンツェのテンパンマ版の目録はプトン・リンポチェがお書きになったと説いているが、プトン・リンポチェはラプジュン6周目の木の龍の年、西暦1364年にお亡くなりになり、ギャンツェのカンギュルが建立される1431年までには数えて76年の差があるので、時間があわない。」（p. 342）と述べておられる。

64　この人物は西暦1642年から西暦1658年までデシーの地位におつきになり、チベットを統治した。訳注：略伝は Petech［1988: 133–134］に述べられている。

65　チョボ・セツン（se bstun）とチョボジェ具吉祥アティーシャの弟子クトン・ツォントゥ・ユンデュン（khuu ston brtson 'grus g-yung drung, 1011–1075）が座主を務めた。

66　ホル月の2月。

せてテンパンマのようにした。

特に密教部は、『如来阿羅漢等正覚者の一切悪趣を清むる威光王儀軌の一分』[67]と『一切如来身口意大秘密の秘密集会と名づくる儀軌大王』[68]、『吉祥暴悪大忿怒怛特羅王なる壱勇者』[69]と『呼金剛と名づくる怛特羅王』・『呼金剛荼枳尼瓔珞制怛特羅王』の２章[70]と『怛特羅王なる吉祥勝楽小品』[71]と『吉祥、勝楽の生と名づくる怛特羅大王』[72]等はインドの原本にのっとって校正して、インドの原本とは違う部分は、インドの注釈を良く考察して正しく決定した。

また経典に疑問が生じた場合は、インドの注釈があるものはそれによって訂正した。密教タントラも集呪部の類と照らし合わせ、無いものに関しては、全てがサンスクリットとして確認できないもの、〔例えば〕ドティン（'gro lding）語の経典とピシャーチ（pi sh'a ci）語の経典と発音が崩れたまま書かれたものと密教の秘密の言葉で書かれているものがあるテキストは、一致する部分が多いものを採用し、サンスクリットそのものについても文法と照らしてわかるものは訂正し、わからないものはそのままにした。[73]

と述べられている。また注目すべきは日本人でセラ寺のゲシェーである多田等観等によって現代に通用するデルゲ版カンギュル・テンギュルの目録が作られたことである。この目録は西暦1934年に東北大学から出版され[74]、世界のデルゲ版カンギュル・テンギュルの目録のお手本となった。幸いなことにデルゲ版カンギュル・テンギュルの木版は今も損なわれずに有情の福田として存在している。

67　D No. 485, Ta 96b-146a.

68　D No. 442, Ca 90a-148a.

69　D No. 431, nGa 304b-443a.

70　D No. 417, 418, nga 1b-30a.

71　D No. 368, ka 213b-346b4.

72　D No. 373, kha 265a-311a.

73　Ta 205a3-b6, pp. 411-12.

74　Tohoku Imperial University, *A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons* (*bKa' 'gyur and bsTan 'gyur*), Sendai, Japan, 1934).

3.10　ラギャ（rwa rgya）版カンギュル

その後、セラ寺の学者のシンサホトクト１世ロサンダルギェー（shing bza' ho tog thu sku phreng dang po blo bzang dar rgyas, 1759–1824）が施主をなさって、デルゲの朱版を原本として西暦1814年に着手して、西暦1820年に完成して建立なさってアムドのラギャの大寺院「兜率天の吉祥生じる場所（dga' ldan bkra shis 'byung gnas）」寺にある「善の海の右に渦巻くもの（dge legs rgya mtsho'i gyas 'khyil）」という名前の印経院に安置なさった。それをラギャ版カンギュルと一般によぶ

〔ラギャ版カンギュルの目録については〕パンチェンラマ７世テンペーニマのお名前をお借りして書かれた『ラギャ版カンギュルの目録・顕密の法の百の門を同時にあける鍵（*a mdo rwa rgya'i bkar 'gyur dkar chag gam bde bar gshegs pa'i gsung rab gangs can gyi skad du 'gyur ro cog gi phyi mo par du bskrun pa' i dkar chag mdo rgyud chos kyi sgo brgya cig car 'byed pa'i lde mig*）』というものがある。ラギャ版の原本はこの目録によるなら

> デルゲ版は間違いが無いことをごらんになって、それを原本としてデルゲ版に倣って作成した。それ以外に、ウラ（dbu lha）の諸尊がサキャ派式だったのをゲルク派式にして、懺悔三十五仏（ltung bshags kyi bde gshegs so lnga）[75]をツォンカパがごらんになった通りのものにした。それだけが違うようにした[76]。

と書かれている。

3.11　モンゴルのフレー（khu re）版カンギュル

その後、外モンゴルのウルガの大寺、ダーフレー（ta' khu re）寺、つまり現在モンゴル国の首都であるウランバートルにあるガンダン寺（dga' ldan dgon pa）で、デルゲ版カンギュルを原本にしてカンギュル開版に着手したが最後まで完成しなかった。

その後、ハルハのジェツンダムパ８世ンガクワンロサンチューキニマ（rje

75　大乗菩薩学論［DNo. 3940, Khi94b5–96a1］に懺法が全て引用されている。

76　18a6–7.

btsun dam pa sku phreng brgyad pa ngag dbang blo bzang chos kyi nyi ma, 1870–1924）とエルデニチェ（erti ni che）家の殿様トントゥプラモ（don grub lha mo）二人から開版を完全にするようにという命令が下り、西暦1908年から残った仕事を継続して、西暦1910年に105帙まで完成して版木をターフレー大寺に安置したことからモンゴルの国のフレー版カンギュルと呼ばれる。この版に関してはインドの学者ロケシュ・チャンドラの研究がある。[77]

3.12　ショル（zhol）版カンギュル

その後、ティクン・ゴチョク（'bri gung sgo lcog）リンポチェ・ンゲトンテンジンチューキワンポ（nges don bstan 'dzin chos kyi dbang po）が、ナルタン版カンギュルは古いという大きな欠点があり、リタン版とデルゲ版カンギュルはウィ地方より距離が離れているので〔ウィに〕お迎えになるのが難しいので、ウィの方でもカンギュルの版木が必要だとお考えになって、ダライラマ13世トゥプテンギャムツォに開版に必要な大量の物資を献上するのと合わせて、〔開版を〕したいという願いについて〔ダライラマの〕承諾を得て、チベット政府が事業の責任を負って、西暦1920年にナルタン版カンギュル、ギャンツェのテンパンマ写本、デルゲのカンギュル等を正しい原本として〔開版に〕着手し、ほとんど完成に近づいた時、西暦1933年にダライラマがお亡くなりになった。[64]

しかしラデン化身ラマ５世トゥプテンジャムペル（rwa sgreng sprul sku lnga pa thub bstan 'jam dpal, 1912–1947）[65]と総理大臣であるランドゥン（glang mdun）公クンガ・ワンチュク（kun dga' dbang phyug）[66]二人〔が政治を握っていた〕ときに完成して、西暦1934年に目録を数に入れて丁度100帙が新しく建立された。それはポタラ宮のすぐ下（zhol）にある「チベットの利楽の蔵の洲（gangs can phan bde'i gter mdzod gling）」という名前の印経院に安置されたことからショル版カンギュルと呼ばれる。幸いなことにこの版木は現在もラサのメル（rme ru）寺で衆生の福田として現存している。

西暦1939年にタタ化身ラマ・ンガクワンスンラブ（stag brag sprul sku ngag dbang gsung rab）[67]とギェルワン化身ラマ・ンガクワンテンジン（rgyal dbang sprul

77　Lokesh Chandra, *A Newly Discovered Urga Edition of the Tibetan Kanjur, Indo-Iranian Journal,* 3, 1959, pp. 175–191, and *Transcription of the Introductory Part of the Urga Edition of the Tibetan Kanjur*, ibid pp. 192–203

sku　ngag dbang bstan 'dzin）二人のお名前で、『仏説のチベット語訳全ての版木〔であるショル版カンギュルの目録〕・世界共通の宝となる善説・神業の鍵（*bdag cag gi ston pa mnyam med sh'akya'i rgyal po'i bka' gangs can 'dir 'gyur ro cog gi gsung par 'dzam gling spyi nor gyi legs bshad 'phrul gyi lde mig*）』というものも書かれた。ショル版カンギュルの目録には書かれていないが、実際の校訂のリーダーは、五明に通じたゲシェーのシェーラブがなさった。その事は、シェーラブ自身の根本ラマであるクンタンのロドー様（gung thang blo gros［rgya mtsho］）に出した手紙[78]に

> カンギュルの版木の建立はほとんど終わりました。テンギュルも版木にするお考えを〔ダライラマは〕お持ちになっているのではないかと思います。[79]

と述べられていることからも明らかである。

3.13　ワラ（wa ra）版カンギュル

その後ンゴル（ngor）[(68)]派の阿闍梨ジャムヤンロテルワンポ（'jam dbyang blo gter dbang po）の直弟子であるワラのダムチューテンパペルサンポ（dam chos bstan pa dpal bzang po, 1875–1945）がカンギュルの大型本を二セットに分割して、小型本206帙を新しく建立してワラの小寺に安置したことからワラ版カンギュルと呼ばれる。

3.14　チャムド（chab mdo）版カンギュル

西暦1950年にチャムドのヤブツァン（yab tshang）[(69)]のロサンコンチョク（blo bzang dkon mchog）とデルゲの王女デチェンドルマ（bde chen sgrol ma）の二人が施主となってラサ版を原本として、全101帙を建立してチャムドの大寺弥勒寺（byams pa gling）に安置した事から、チャムド版カンギュルとして知られる。この原本はラサのショル版を写したものであるという説もある。

ここにいう。

78　*rje btsun shes rab rgya mtsho 'jam dpal dgyes pa'i blo gros kyi gsung rtsom pod gnyis pa*（青海民族出版社1982）

79　p. 120, 13–14.

無限の仏のお言葉である千の光を放って、
衆生の無知の暗闇を負かして、善業ある智慧という蓮華を開くようにする太陽であるカンギュル。
これはすばらしいものだ。味わえば味わう程甘い吉祥を与える美味。
このカンギュルという蜂蜜の栄養のエッセンスは、〔チベットからは〕行くのが難しい聖なるインドの国からお招きするという一千万の苦労を積んだ如意の宝だ。
数え切れない仏説―それは清静な鏡―に写っている文章と意味の間違いは、カルパの間（とても長い間）注意しても見つからないのは仏の智慧のためである。
大木（人間の身体）はたくさんの信仰と尊敬の果実を載せることで〔自然に〕曲がり、
蓮華（人間の手の指）はカンギュルの月光にあたって花が閉じるように合掌する。
〔私は以上のような信仰を抱いて〕どのようにカンギュルが建立されたかというおおよその歴史を提示した。

4.　テンギュルの開版事業について

4.1　シャル本（zhwa lu）テンギュル

テンギュル開版事業について述べる。ナルタン本カンギュルが編纂されるまでは前述と同じである。その後にラプジュンの 6 周目の木の犬の年（西暦1334年）にシャルのクシャン（sku zhang[70]）であるクンガ・トントゥプ（kun dga' don grub[71]）が施主をなさって、テンギュルの全ての写本を建立なさった際に、プトンを校訂者としてお招きになった。

それについてはプトンがお書きになった『シャル本テンギュルの目録』またの名を『テンギュル全ての目録・如意の宝石である自在の勝利者の数珠（*zhwa lu'i bstan 'gyur dkar chag gam bstan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag yid bzhin gyi nor bu dbang gi rgyal po'i phreng ba*[80]）』には

80　Toh. No. 5205.

大クシャン・クンガ・トントゥプがウィ・ツァンの地にいる書道の達人をたくさんお招きになって、教証と理証に通じる善知識であるシャーキャセンゲ（sh'akya sengge）とダルマチャンチュプ（dar ma byang chub）とションヌペル（zhon nu 'phel）達がよく指導なさって、大寺院ナルタン寺に安置されたテンギュル全部を原本にして、そこにない希少な原本と新しく訳されたものをウィ・ツァンの大小の寺から努力して探して、論書を千ほど増やした。原本にある重複した部分は全て取り除いて、特別な聖者の論書を3392篇おさめた。これらの作業は木の雄の犬の年（1334年）8月1日に着手してその年の12月15日に完成した。[81]

と述べられている。順番は同書によれば

この〔テンギュルに収録されている経典は〕優れたものから劣ったものへの順番である。その順番に従えば最初は内明の論書である。それは、大乗仏教の密教から顕教、小乗仏教の論書等、因明、声明、医方明、工巧明の論書等が順番に収録された。他にもチベットの大学者達がお書きになった大事な論書で稀覯書となっているあらゆるものが順番に収録された。さて優れた対象に対して礼拝することは、一切の善果を得る因であり、優れた者の行いであるが故に行なうのである。優れた対象への祈りである讃頌部〔のテキスト配列については〕以下の如し。カ帙（ka pa）には……[82]

さて五明の内、仏教の論書においては、果である密教と、因である顕教の乗のグループの二種があって、まず果である密教の乗のグループについては、カ帙（ka pa）に『吉祥の時輪を集めたタントラの王（*dpal dus kyi 'khor lo bsdus pa'i rgyud kyi rgyal po*）』……[83]

と述べられているように冒頭はテンギュル全体の祈りとしての讃頌部がある。その次に内容の優劣に基づいた順番で内明が収録されており、内明の中ではタントラ部が、タントラ部の中では、プトン（bu ston）が時輪タントラをタントラ部の中で最も優れているとしたため、〔時輪タントラが〕最初に配列されてい

81　La 119a7-b3.

82　La 4b5-5a1

83　La 10a1-2.

る。この順番は後で建立したテンギュルに踏襲された。

しかし、やや異なるところは北京版とナルタン版テンギュルのタントラ部はプトンのように時輪タントラが冒頭に配列されるが、デルゲ版テンギュルのタントラ部はヘーヴァジラタントラ（kye rdor）から配列される。その理由は後述するデルゲ版テンギュルの目録に

> タントラの注釈の配列などわずかな点について、少しは大ンゴルのドルジェチャン（rdo rje 'chang）等の目録とも良く照らし合わせた。

と述べられているように、サキャ派がヘーヴァジラタントラを最も優れたタントラとしたためである。テンギュル全ての原点として知られているシャルのテンギュルの帙数は124帙である。

4.2　ネドン（sne gdon）本テンギュル

その後ラプチュン6周目の水の虎の年、西暦1362年に大司徒チャンチュプギェルツェン（byang chub rgyal mtshan）[(72)]が施主をなさってテンギュル全ての写本をネドンで建立した。

その目録をプトンリンポチェの弟子で声明学者のリンチェンナムギェル（rin chen rnam rgyal, 1290–1364）がお書きになった。それについて『ネドン本テンギュル目録』またの名を『テンギュル全ての目録•如意の宝の箱（*sne gdong bstan 'gyur dkar chag gam bstan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag yid bzhin gyi nor bu rin po che'i za ma tog*）』（Toh. No. 5249）に

> 政教二規の支配者である大司徒チャンチュプギェルツェン（1302–1364）が〔テンギュルが必要だと〕お考えになり、下した命令に従って、領主であるパクシ・コンチョク（pakShi dkon mchog）がウィ・ツァンにいるウチェン・ウメの書体に習熟した書家達をお招きになった。
>
> そして、シャルのセルカンの経堂に安置されているテンギュル全てを原本にして、そこにない希少な原本で後に手に入ったものと、新しく翻訳された27個を加えたものと一緒に、写本全ての文章の間違いを訂正し、古い言葉を新しい言葉に正しく改めた。
>
> 書家たちに良くお願いして、釈迦の比丘・修行者・戒律の伝統を守る人

ソナムペルサンポ（bsod nams dpal bzang po）がウチェン・ウメの写字生を指導し、密教部の教証と理証に通じた善智識であるシャキャオ（sh'akya 'od）と、顕教部の教証と理証に通じた善智識であるチャンチュプギェルツェン（byang chub rgyal mtshan）の両者が特別に指導を行なった。テキストの種類3429あるこのテンギュルは　水の雄の虎年（1362）の６月８日に着手してその年の10月14日に完成した。[84]

と述べられている。ネドンのテンギュルは202帙ある。

4.3　ギャンツェ本テンギュル

ギャンツェ本テンギュルに関しても続いて解説を加える。それは鉄の豚の年、西暦1431年にギャンツェのデシーであるラプテンクンサンパクパ（rab　brstan kun bzang 'phags pa）がギャンツェのテンパンマというカンギュルを建立した後、ギャンツェでテンギュルも二回建立したのである。

それについては私一人が持っているギャンツェ〔本テンギュル〕の写本である世親の倶舎論の自注の奥書には

> 大司徒ラプテンクンサンパクパ（rab brtan kun bzang 'phags pa）という全てに知られたお名前を持つ方ご自身の意志によって、大菩薩であるチューキリンチェン（chos kyi rin chen）がリーダーをなさって、最高のラマ達の望みを完全に満たすため、仏の教えの宝が全ての地域で広がり盛んにするため、教えの伝統を守る優れた人たちのお体が健康で長生きにするため、大いなる福徳の吉祥の威光を自在にする人・父たる正しき王・ナンチェン（nang chen）家のクンガ・パクパ（kun dga' 'phags pa）と母であり女王であるサンモペルワ（bzang mo dpal ba）と弟であるナンチェン（nang chen）家のラブジョルサンポ（rab 'byor bzang po）等の全ての有情の心に二資糧の大いなる財産を生み、完全な幸福が欠けることのないよう、最高の大菩提を得るために有雪の国でカンギュル全てを黄金で筆写した。
>
> 〔その後、〕その顕密の注釈、知られている教えを確かなものにした論書、十地の菩薩達と多くの賢者であり聖者がお書きになったもの、インド、カ

84　Sa 113a4-b2.

シミール、ウゲン、シャンバラ、南ランカ、スリランカ、スマトラ、センリン、サホル、ネパール、ホータン、中国の国〔の言葉〕よりチベット語に翻訳した経典を含むテンギュルを信仰の依り所として建立した。

また法王ラプテンクンサンパクパと世間の大地を仏法に従って治める大権力者タシーパパクパ（bkra shis 'phags pa）二人の菩提を弔い、繁栄した政治と自他の心相続に二資糧を満たしてから、一切智を得るために、大法王タシーラプテンペルサンポ（bkra shis rab dpal bzang po）が、カンギュル全ての金写とテンギュル全てを大事な信仰の依り所として建立した。そのテンギュルの中に収録されていた倶舎論の注釈を自分のイダムとして筆写した。この筆写によって全ての有情に広大な利益を生じるようになりますよう！[85]

と述べられている。以上のように、法王ラプテンクンサンパクパがカンギュルの後にテンギュルを建立したことが明らかである。その後、法王ラプテンクンサンパクパの弔いのため大王タシーラプテンペルサンポがカンギュル全ての金写を建立させただけでなくテンギュル全てを建立した。そしてその中の一つがこの具舎論の注であると述べられている。

タシーラプテンペルサンポが建立なさったカンギュルとテンギュルの大校訂者に関してもタイシトゥ•チューキジュンネーの全集のナ帙（na pa）にある『行の伝統を守るカルマ派の修行者の伝記・たくさんの宝石である月のような水晶の数珠（*sgrub brgyud karma kaM tshang brgyud pa rin po che'i rnam par thar pa rab 'byams nor bu zla ba chu shel gyi phreng ba*）』には

シャルの大訳師チューキョンサンポ（chos skyong bzang po）はグー・ククパラツェー（'gos khug pa lha btsas）とグー・チュートゥプ（'gos chos grub）[86]、グー・ロツァワ・ションヌペル（'gos lo ts'a ba gzhon nu dpal）の御出身の一族から、父である領主サムトゥプペルサンポ（bsam grub dpal bzang po）と母であるリンチェンチューゾム（rin chen chos 'dzom）の子として鉄の雌の鳥の年（1441）にお生まれになった……

85　Gu 395b5-396a1.

86　大学者上山大俊のグー・チュートゥプが漢人であると主張する新説は根本から間違っている。訳者：上山［1997：3-9］を参照。

ギャンツェで新しく建立されたカンギュル・テンギュルの大校訂者もなさった。サキャにいらっしゃって、ダグチェン•ギャカルワ•クチェー（bdag chen rgya khar ba sku mched）より dmar po skor gsum 等の潅頂と読誦による伝授口伝を受けた。阿闍梨セルタク（gsal grags）より瑜伽の諸経典（D. Nos. 4035-42）、阿闍梨ギェルツェンドルジェ（rgyal mtshan rdo rje）に gshed dmar lha lnga の潅頂を受けた。それからラサにいらっしゃって、ジョカンとサムイェーとデンサティル等に巡礼した。ネウドンで主クンレクパ（kun legs pa）の望みでウマガワ（dbu ma dga' ba）がお書きになった『聖•文殊師利名等誦難語釈』（D No. 2540, gu）を訳した。いくらかの潅頂も受けた。カンカルのドルジェデンパにいくらかの潅頂を受けた。brtag gnyis slad dod ngo sprod[(73)] を献上した。シャマルパ御前にお会いした。良い褒美を賜った。タクルンのンガクワンタクパにお会いした。『聖、茶枳尼金剛篋と名づくる怛特羅大王儀軌』（DNo. 419, nga）を訳し直した。サンスクリットの文法等も教えた。前後していくらかの潅頂も受けた。コラムパ（go rams pa）から入中論の解説等を受けた。チェンガ•ツェニーパ（spyan snga tshe gnyis pa）の望みで、『倶舎論の注』（D No. 4421, Tho）を訳しなさった。シャマルパ 4 世のお考えに従い『倶舎論の注 • 雷光（*mdzod 'grel gnam lcags thog zer*）』を訳した……[87]

それからシャルの本山[88]にいらっしゃった。……安慧の『阿毘達磨蔵疏廣注』（No. 4421, Tho）と『文殊師利声明記論』（D. Nos. 4280-81, Re）等以前まではこのチベットで知られていなかった顕密と、〔それ以外の〕学問のたくさんの典籍を訳した。[89]

と述べられていることから、ギャンツェのテンギュルはシャル大訳師が大校訂者をなさったようである。しかし倶舎論の自注の奥書については校訂をなさった人は別人である事は確かである。その理由はこの〔奥書〕には誤字がとても

87　Na 1a1-2a4

88　今ポタラ宮にあるシャルの『維摩詰所説経』のサンスクリット版はシャルの大訳師の本であることは100パーセントと決定できなくてもこの大訳師の事業と関係がある。

89　Na 2b4-6

多いからである。

4.4　チョンギェー・チンパルタクツェ（'phyong rgyas 'phying bar stag rtse）宮殿のテンギュル

それについて述べる。『チョンギェー•チンパルタクツェのテンギュルの目録』もしくは『全テンギュルの目録•三世間の幸せである蓮華の園が開く太陽（*'bstan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag 'jigs rten gsum gyi bde skyid pad tshal bzhad pa'i nyin byed*）』には

> シャルのセルカンの経堂に安置されている全テンギュルを原本として、それらを大寺院デプン寺とセラ寺と大昭寺の経堂やチョンギェーのリボデチェン寺等に安置されていた諸テンギュルと比較して、不純物として混じった誤りを、五明に通じた人・コンチョクチュータク（dkon mchog chos grags[90]）を初めとし、その他にトゥムパ・ティンレーペルサン（bhrum pa 'phrin las dpal bzang）とダルパ・ロセルテンジン（'dar pa blo gsal bstan 'dzin）、トゥプ寺（grub gling）のロサンゴートゥプ（blo bzang dngos grub）、教化者プンツォクギャムツォ（phun tshogs rgya mtsho）、チャン（lcang）の尊者・プンツォクギャムツォ（phun tshogs rgya mtsho）、スルカンパ・ンガクワンペルサン（zur khang pa ngag dbang dpal bzang）、ギェルタンパ・ンガクワンペルサン（rgyal thang pa ngag dbang dpal bzang）、デキーラプテンパ（bde skyid rab brtan pa）・ペンジョルギャムツォ（dpal 'byor rgya mtsho ）、ギェルサルガンパ•コンチョク（rgyal sar sgang pa dkon mchog）等文法と正書法に精通した援助者である喜びの 4 人及びその他の 6 人に正確な校訂をさせた。
>
> 古い目録に〔記されている〕諸テキストで、努力して探しても見つけられず、追加すべきものについては注をつけた。一切智者プトン以降現在に至るまでの新訳の顕教・密教・それ以外の学問についての古籍で、残っていた由緒の正しいもの合計780を加えた。西のンガリ三区、東のドカム 3 高地、ツァンのイェール（g-yas ru）とルラグ（ru lag）の二つ、ウィのウル

90　ナムリン家の大学者であるコンチョクチュータク（dKon mchog chos grags, 1646–1718）。

（dbu ru）とヨル（g-yo ru）二つ〔ある中で〕最後〔のヨルに位置する〕チョンギェー王の宮殿で二部建立した。

〔その作業は〕管理者であるネモ（sne mo）寺のドルジェギェルツェン（rdo rje rgyal mtshan）とルコンヌプパ・シチョーツェタル（（klu gong nub pa sri gcod tshe thar）、トカルワ（lto dkar ba）、エパ・ウーゲン・ノルブ（e pa o rgyan nor bu）等の 4 人、校訂者のラゴン・ドルジェ（lha mgon rdo rje）等の 6 人、その他にチン•ウーゲン•ラプテン（bying o rgyan rab brtan ）とニェモ・ダルギェ（snye mo dar rgyas）等127人、〔経典の包みにする〕布を作る人のセーパ・ルントゥプドルジェ（bsad pa lhun grub rdo rje）、木工のタチ・トゥプジョル（gra phyi 'grub sbyor）、鉄工のタナン・デーサン（gra nang 'bras bzang）、皮職人のチョンギェー•タラプ（'phyong rgyas rta rab）等が火の兎の年（1687）から龍の年（1688）までの間に綺麗ですばらしいものに完成させた。[91]……

この有雪の国の数多あるテンギュルの目録の中から一切智者・プトン・リンチェントゥプがお書きになった『宝の筐』（rin po che'i za ma tog[92]）を原本にして、人の自在者で五明に広く深く通じた人である公子・サンギェギャムツォ（sangs rgyas rgya mtsho1653-1705）が、私（ダライラマ 5 世）が長寿のために大きな努力をはらって責任を負って達成した善〔行〕を、無比なる大菩提を〔得るための〕因として回向(74)し、それに付随して仮初めの〔世俗的な〕幸せが生じる。仏である無比の釈迦が鉄の猿の年に降誕されて2648年たった年で、『賞賛の注釈』の〔暦の計算の〕やり方〔に従えば〕ビハラワと呼ばれるナムジュンの年、具体的には土の龍の年（1688）に、三世間の幸せの牡丹が開く太陽というこの〔目録〕は、サホルの先達僧であるドントゥク•ニャムペーランツォ（gdong drug bsnyams pa'i lang tsho, 1617-1682）(75)が書いた。筆記者は宗教舞踊の教師である比丘•ンガクワンコンチョクである。[94]

91　Tso142a5-b1.

92　これはネゥドン版テンギュルの目録の名前であって、プトン•リンチェントゥプがお書きになった目録の名前は『如意の帝釈の数珠（*yid bzhin gyi nor bu dbang gi rgyal po'i phreng ba*）』という。

93　手金剛の注記［D. 1402 Ba 90a6］

と述べられている。要するにチョンギェー・チンパルタクツェ宮殿のテンギュルの目録は土の龍の年（西暦1688年）にデシ・サンギェギャムツォ（1653-1703）[76]が偉大なるダライラマ５世御本人の著作を装って書いたが、実際にはダライラマ５世は水の犬の年（西暦1682年）に亡くなっているので、時期が合わない[77]。この目録と同じように、『デルゲ版テンギュル目録（*sde dge bstan 'gyur dkar chag*）』[95]には

> チョンギェー・チンパルタクツェ宮殿で、シャルのセルカンの経堂に〔あった〕テンギュル全てを原本にしたものと、ヤルルンパが建立した全テンギュルを〔原本として〕受け継がれ広がって大寺院である吉祥備わるデプン寺とセラ寺と大昭寺の寺院とチョンギェー等にある筆写本を原本にしたものと、そこにないプトン・リンポチェから現在に至るまでの新しい訳と、顕密と、それ以外の学問の根拠の確かな古本で前〔のテンギュル〕にないものなどを含んで全部で780程を加えて、全部で4209ほどのテキストが集められた。〔それに〕ついて、原本の大校訂者にはナムリン・パンチェン・コンチョクチュータク（rnam glimg paN chen dkon mchog chos grags, 1646-1718）をはじめとする書法と文法と〔その他の〕学問に詳しい人達によって作られて建立されて、その目録は『三世間の幸せの牡丹の園が開く太陽（*'jigs rten gsum gyi bde skyid pad tshal bzhad pa'i nyin byed*）』といい、仏王であり一切智者である偉大なる5世がお書きになった[96]。

と〔ダライラマ５世が目録を書いたように〕述べられている。また、チョンギェー・チンパルタクツェ宮殿に建立されたテンギュルは上述したように225帙あるため、それを原本にして建立された北京版テンギュルとナルタン版テンギュルも225帙あるのである。

4.5　北京版テンギュル

上述したチョンギェー・チンパルタクツェ宮殿のテンギュルが後にポタラに安置され、それを原本として北京版テンギュルが建立された。それについてト

94　Tso 145a3-7.

95　D No. 4569 Shiri306a6-b3.

96　Shiri306a6-b3

ゥケン•ンガクワンチューキギャムツォ（thu' u bkwan ngag dbang chos kyi rgya mtsho, 1680–1736）の著作である『テンギュルの目録・聡明なる首飾りである如意の数珠（*bstan 'gyur rin po che'i dkar chag blo gsal mgul rgyan tsi-nta ma Ni'i 'phreng mdzes*）』の北京版には

> テンギュルを新しく建立するにあたっては、ダライラマ５世が、プトン・一切智者が並べた順番通りにして、新たに重要な経典を付け加えて建立して、ポタラに安置した〔チョンギェー・チンパルタクツェ宮殿の〕テンギュルを、文殊かつ法王のツォンカパの筆頭の弟子ジャムヤンチョジェ[97]の化身ジェツンダムパフトクトが、仏教を広く盛んにするために、康熙帝にお願いして招請して原本にして、〔北京版テンギュルを〕新しく建立なさった。尊者である文殊そのものの人主〔としての形をとった〕特別な化身である康熙帝が、衆生の利益の根本である仏教を上から上に発展させて、信仰を求める人たちに、尽きること無い法の布施を広げるために、御命令によって版本に印刷なさった。[98]

と述べられている。要するに雍正２年(西暦1724年)に着手して、乾隆３年(1738)年に最後まで完成して建立して、北京に安置したテンギュルを北京版テンギュルという。これはテンギュル全てを版木に建立した最初である。帙数と目録も、チョンギェー・チンパルタクツェ宮殿に建立したものと同じである。それについては『テンギュルの目録・聡明なる首飾りである如意の数珠（*bstan 'gyur ri po che'i dkar chag blo gsal mgul rgyan tsi-nta ma Ni'i 'phreng mdzes*）』には

> 偉大なるツォンカパの全集を版木にしてテンギュルの中に収録することを申し上げたので、大皇帝が喜びとともに御命令を下した。その通りにそれらの論書を新たに入れて、版木にしたテンギュルの目録を書こうとする際に、その古い論書は一切智者で観音である偉大なるダライラマ５世がお書きになった目録通りで、新しく入れた尊者で一切智者である大ツォンカパの著作の順番は……[99]

97　西暦1379年にお生まれになり、1416年にデプン寺を建立なされ、1449年にお亡くなりになった。

98　9b2–6.

と述べられている。版木は西暦1900年に外国軍が侵略した時に〔彼らに〕壊されて、[78]一つからたくさんへ広がる究極のすばらしい事業はひとまず終わった。

しかし幸運にも私がチベット学を教えている大谷大学の図書館に北京版テンギュル一セットが所蔵されている。1955年から58年の間に大谷大学によって、管理下にあったそれが影印されて、目録をあわせると151冊になったものが、鈴木学術財団（Suzuki Research Foundation）より出版された。45冊がカンギュルと46冊目以降がテンギュルである。それと同様に大谷大学から1965年から96年の間に北京版、デルゲ版、漢訳大正大蔵経のテンギュルをお互いに校勘した北京版テンギュル勘同目録も出版された。[100]このテンギュルは版刻の際にいくつかの誤字が生じてしまったが、時にはデルゲよりも正しいこともある。その他にもツォンカパが大事になさったナクツォ（nag tsho）[79]訳の『入中論』（P No. 5261, 'a）等を初めとするデルゲに無いテキストが少なからず収録されている。このテンギュル225帙、テキストは4209ある。

4.6　ナルタン版テンギュル

ポラワ・人王・ソナムトプギェー（pho lha ba mi dbang bsod nams stobs rgyas, ポラネー）が施主をなさってラトゥ（la stod）にあるシェルカル（shel dkar）でラプジュン12周目の鉄の鳥の年のホル月３月27日、西暦1741年に版刻を開始して、水の犬の年のホル月10月25日、西暦1742年までの１年７ヶ月の間にテンギュルの版木一そろいを建立したのである。それについては『ナルタン版テンギュルの目録（*snar thang bstan 'gyur dkar chag*）』には

> 鉄の鳥の年３月27日から開始して、ンガチェン（rnga chen）という水の雄の犬の年のホル月10月の[80][101]25日

と述べられていて、その後に版木がツァンのナルタンに安置されたので、ナルタン版テンギュルと呼ばれる。

99　10a5-7.

100　The Otani Daigaku Library, *A Comparative Analytical Catalogue of the Tanjur Division of the Tibetan Tripitaka*, Kept in the Otani University Library, Kyoto Ⅰ, 1-6, Ⅱ, 1-3, 1965-1997.

101　Tso 7b3-4.

その原本は北京版のようにデシ・サンギェギャムツォがチョンギェーのチンパルタクツェ宮殿に建立したテンギュルの写本であることは疑いない。何故かというなら北京版とナルタン版の２つはつづりと文章と章と順番が一致するところがとても多いからである。しかしプルブチョク寺の初代化身ラマ(81)がお書きになった『仏説を注釈した全論書の目録・意味ある梵天の声（*bka' yi dgongs pa 'grel ba'i bstan bcos 'gyur ro cog gi dkar chag don ldan tshangs pa'i dbyang*）』には何を原本としたのかは明確に述べていない。

このテンギュルには225帙と76883葉ある。文化大革命という前代未聞の災害の時に破壊されて、一つからたくさんへ広がる大偉業はここでしばらく終わった。しかし幸運にもナルタン版テンギュルはコピーされてラサで新しい版木が刻された。また、ポラワ・人王・ソナムトプギェーが施主をなさって、チョンギェーのチンパルタクツェ宮殿に建立したテンギュルの写本を原本として、黄金で筆写した比類無きテンギュルが建立された。それはガンデン寺の本山に献上され、無傷で現存している。そのテンギュルは西暦1988年に中国でもとどおりのままで影印出版された。西暦2000年に私の弟子のチベット学者の三宅伸一郎氏が北京版と詳しく校勘したガンデン金写版テンギュルの目録も作った。[102]

4.7　デルゲ版テンギュル

デルゲ版テンギュルの開版について述べる。ゴルチェン・クンガ・サンポ（ngor chen kun dga' bzang po(82)）〔が開いたエワム・チョデン e waM chos ldan 寺の〕第30代座主であるジャムヤンタシールントゥプ・タクペーギェルツェン（'jam dbyangs bkra shis lhun grub grags pa'i rgyal mtshan(83)）が〔開版を〕依頼して、ラプジュン12周目の火の雌の蛇の年、西暦1737年にデルゲの法王テンパツェリン（bstan pa tshe ring）が施主をなさって、テンギュルの版刻を開始して、７帙ほど完成した時に法王がお亡くなりになった。しかし、テンパツェリンの息子で、出家者でもあり王でもあるラマ・クンガ・ティンレーギャムツォ（bla ma kun dga' 'phrin las rgya mtsho）が版刻の仕事を最後まで行なって、木の鳥の年、

102　Shinichiro Miyake, "Comparative Table of the Golden Manuscript Tenjur in the dGa'-ldan Monastery with the Peking Edition of Tenjur", *Annual Memoris of the Otani University*, Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Otani University, Kyoto, Vol. 17, 2000, pp. 1-65.

西暦1744年に７年の期間で完成して、デルゲの大印経院に安置したことからデルゲ版テンギュルと呼ばれる。

その原本は、大校訂者ツルティムリンチェン（tshul krims rin chen ）がお書きになった『仏説を注釈する論書のチベット語訳の全て・全ての絶えることのない法の施しの稀有なる神通力ある円劫の原本の福の雲のかたまりが広く満たされた状態についてのすばらしいお言葉の海を増やす新しい月（*kun mkyen nyi ma'i gnyen gyi bka' lung gi dgongs don rnam par 'grel ba'i bstan bcos gangs can pa'i skad du 'gyur ro 'tshal gyi chos sbyin rgyun mi chad pa'i ngo mtshar 'phrul gyi phyi mo rdzogs ldan bskal pa'i bsod nams kyi sprin phung rgyas par dkrigs pa' i tshul las brtsams pa'i gtam ngo mtshar chu gter 'phel ba'i zla ba gsar pa*）』には

〔デルゲ版テンギュルの原本は主なものは四つある。一つ目は〕シャルのセルカンの経堂に安置されているテンギュル全てを原本にして書家達を集めて建立したテンギュルの経巻である。

〔二つ目は〕シャマルパの宝冠を握る人の４代目•菩薩の教えを示す大きな太陽・ペルデン・チューキタクパ（dpal ldan chos kyi grags pa）の援助によってチンパルタクツェ宮殿で建立された論書のチベット語訳全てを原本にして、一切智の功徳の海に入る門になる支分を伴った五明をその通りに理解するお方・理解した全てを間違いの無い言葉で伝授することにおいては無畏の大智者であるお方・カルマ・シトゥ・リンポチェ・チューキジュンネー（karma si tu rin po che chos kyi 'byung gnas）ご自身が取り仕切って建立したテンギュルである。

〔三つめは〕過去•現在•未来の三世を等しく御覧になる知恵の眼の視野が広い法主・カルマパ・藍色の仏冠[84]によって髻を美しく飾る聖者達の歴代の内のカルマパ・イェシェードルジェ（ye shes rdo rje, 1675-1699[85]）の時代に本尊として安置なさったものを、後に比類無い力の転輪聖王であり地上の帝釈天であるデルゲのテンパツェリンに福徳を積む拠り所としてお与えになられたテンギュルである。

〔四つめは〕大王自身の供養の福田として、きちんと整えられた藍色の紙に、吉祥の海の宝である銀を良く精錬したインクによってとても注意深く

書いたテンギュルである。

その四つ以外に弥勒の五法等の個別の版本等をできるだけ手に入れて、校正する原本のために特に集めた……[103]

それらの中で、シトゥ・リンポチェのテンギュルは、内容が完備していて、顕教の乗と密教の乗に関する部分は良いものという定評があったので底本とした。しかしこの中にも因明に関する者等いくつかは、筆写による間違いが多いため、文字の増減と書き間違いを判断するのは難しかった。だが、他の原本はこれと同じくらい良いものがないのであまり役にたたなかった。また、他の信頼できる原本と校勘したものも、カム地方では入手することが大変難しかった。以上のような大きい問題点が残ってしまった。[104]

と述べられている。そして順番は同書によれば

ここにランクの高い経典と低い経典の順番に関しては、最初に内明の論書から始めた。密教、大乗の顕教、小乗の論書の順番である。その後に〔内明以外の〕因明と声明と医方明と工巧明の論書等を順番に収録した。

他にもチベットの昔の学者達による重要な論書で継承されてきた貴重書の全ては、前の〔テンギュル〕の目録に収録されている通りに収録した。また前伝期の大蔵経目録に収録されておらず、別のところにあって後伝期に見つかった古い論書、新訳であっても前伝期に入れたものや入れないもので後伝期の目録それぞれに入っている論書については、後学の者達(86)のために一覧にして示した。

そして回向〔の言葉〕と請願〔の言葉〕と吉祥偈で飾り、それと一緒に収録されている各論書のお名前を述べる。最初に特別な〔仏・菩薩・高僧〕の功徳を随念して礼拝することは、一切の善果を得る因であり、聖人達の稀有な行いの痕跡を成就するために行なうのである。優れたものとなった対象への帰敬である讃頌部〔のテキスト配列については〕以下の如し。カ帙（ka pa）には『殊勝讃』……[105]

103　D Shri307a1-b1.

104　D Shri307b6-308a2.

105　D Shri 338a7-b4.

と書いてあるように最初に論書全てを帰敬するやり方で讃頌〔を収録し〕、それから論書のランクの高いものと低いものの順番に関しては内明からの順番としたのである。

その理由は同書によれば、

> テキスト本文の名前と順番の並べ方は一切智者プトン・リンポチェの目録を主とし、本文と比べて欠けている所や余分な所も全て直して、タントラの注釈の収録については、少しはゴルチェン・ドルジェチャン[106]等の目録とも良く比べた。(87)[107]

と述べられており、帙数は

> ニョ帙(nyo pa)に著者のお名前が無いものについては、『義不疑註』（D No. 4365, nyo）……『心性少許略説』（D No. 4376 nyo 294a-299a）等である。[108]

と述べられていて、カ帙（ka pa）からニョ帙（nyo pa）の間は207帙印刻した。その後にト帙（to pa）からポ帙（po pa）の間と目録を一緒に後で印刻して加えて、現在は213帙と64512葉ある。

このテンギュルの特長は他の版本より文字の間違いが少ない事等があるが、誤字が無いわけではない。例えばこのテンギュルにおいて shin du と kun du と書かれているところは一般的な文法のように shin tu と kun tu と直すべきである。その理由について述べると、それらは〔本来は〕再添後字の da があるが、それを省略したものである。(88)それについては文字数を削って簡単にする利点があるが、再添後字の da の後に接辞する助辞を本来定められているように用いないなら、今も正しい方言で発音されている音と異なってしまうので、〔文法的に正しい方向に〕あわせるべきである。

幸運にもデルゲ版カンギュルやテンギュルの版木は現在も損なわれずに衆生の福田として存在する。それに合わせたかのように、中国チベット学研究センター（中国蔵学研究中心）がこのデルゲ版テンギュルを原本としたテンギュル

106　ゴルチェン・クンガ・サンポ（ngor chen kun dga' bzang po, 1382-1456）を指す。

107　D Shiri 499a5-6

108　D Shiri 464a6-b2

の校訂本を出版しつつある。

4.8　チョネ版テンギュル

チョネ（co ne）の領主（dpon）テンスンツェリン（bstan srung tshe ring）と彼の母親リンチェンペルゾム（rin chen dpal 'dzoms）の二人が施主をなさり(89)、アムドのチョネにおいてラプジュンの13周目の水の雌の鳥の年、西暦1753年に版刻が始められ、水の雌の龍の年、西暦1772年で、数え年で21年の間にテンギュル全てが建立されたものをチョネ版テンギュルと呼ぶ。

その原本はジャムヤンシェーパ（'jam dbyang bshad pa）2世・ジクメワンポ（'jigs med dbang po, 1728–1791）がお書きになったタシーキル（bkra shis 'khyil）版の『チョネ版テンギュル目録』又の名を『仏説の注釈である論書全ての目録・如意の宝の数珠（*co ne bstan 'gyur dkar chag gam bka' yi dgongs pa 'grel ba'i bstan bcos 'gyur ro cog gi dkar chag yid bzhin nor bu'i 'phreng ba*）』には

> 政教二規の円満でとても高みにあるデルゲの先王が、シャルのセルカンに安置されたテンギュルの写本とチンパルタクツェ宮殿に安置されたテンギュルの写本を原本にして版刻して尽きない法の施しの門を開いた。これ（チョネ版）についてはその〔デルゲの版本〕自身を原本にして版木にするなら……[109]

と述べられているようにデルゲ版テンギュルを原本にした。版刻した期間も同書によれば

> 水の雌の鳥の年（1753年）より期間は数え年で21年の間に大きな努力によって完成した。[110]

と述べられている。

このテンギュルはデルゲ版テンギュルの最後に増補されたト帙（tho pa）からポ帙（po pa）までで目録等の5帙は存在しない。ともかく208帙と65425葉ある。アメリカの国立図書館にあるチョネのテンギュル一セットは、アメリカの

109　241a1–3

110　241b5

世界宗教高等研究所（The Institute for Advanced Studies of World Religions, New York 1997）よりマイクロフィルムにされた。

5.　北京版カンギュルとテンギュルの構成について

それについてはカンギュルとテンギュルの分類とテキストのおおよそは〔他と〕共通している。それらについては、大谷大学から、北京版、デルゲ版、漢訳の大正大藏経を互いに詳しく校勘した北京版のカンギュル・テンギュル目録〔があること〕を上述したので、ここでは繰り返して述べない。しかし、配列を北京版の〔構成〕通りに簡単(90)に述べるなら以下の通り。

1.　カンギュル
秘密部（P Nos. 1-729）
般若部（P Nos. 730-759）
宝積部（P No. 760）
華厳部（P No. 761）
諸経部（P Nos. 762-1029）
戒律部（P Nos. 1030-1055）
目録

2.　テンギュル
讃頌部（P Nos. 2001-2063）
秘密疏部（P Nos. 2064-5183）
般若部（P Nos. 5184-5223）
中観部（P Nos. 5224-5480）
諸経疏部（P Nos. 5521-5586）
唯識部（P Nos. 5521-5586）
アビダルマ部（P Nos. 5587-5604）
律疏部（P Nos. 5605-5649）
本生部（P Nos. 5650-5657）
書翰部（P Nos. 5658-5699）

因明部（P Nos. 5700-5766）
声明部（P Nos. 5767-5794）
医方明部（P Nos. 5795-5801）
工巧明部（P Nos. 5802-5819）
修身部（P Nos. 5820-5831）
雑部（P Nos. 5832-5962）

上述のものを合計すれば、目録を数えると、カンギュルには1056点の経典が、テンギュルには4209点の経典がある。

6. チベットにおいて、カンギュル•テンギュルをどのように崇拝するかについて

それについては勝利者であるダライラマ8世ジャムペルギャムツォ（'jam dpal rgya mtsho）がお書きになったダライラマの師であるパンディタ•イェシェーギェルツェン（ye shes rgyal mtshan[91]）の伝記である『ムニの教えの蓮華を開く太陽（*thub bstan padmo 'byed pa'i nyin byed*[111]）』には

> 秋には新しく建立されたカンギュル・テンギュルでペーツェル（pad tshal[92]）が駄獣を用いて手順通りに招請したものを９月17日にチャムティン（byams sprin[93]）の経堂に安置した。その時、聖自生ワティサンポ（wa ti bzang po[112]）より放たれた光を持った白い虹がカンギュル・テンギュルに入る等、素晴らしい現象も多く起こった。後世においてこの国（キトン skyid grong）に幸せがあるかないかはこのテンギュル・カンギュルにかかっているのであるとされ、その国の全ての人が大事にした。
>
> その翌日、具吉祥アティーシャが逝去された特別な祝日（チベット暦９月

111　Published by Library of Kyidong Samtenling Tibetan Monastery Boudha Nadh Kathmandu, Nepal, 1997.

112　伝説ではソンツェンガンポがある比丘に変化して栴檀の茎を裂いた中から観音の自然に現れた４人の兄弟と呼ばれるものの一つで、一般にはキトンのチョボ（jo bo）という。ゾンガ（rdzong dga'）の寺院が招請して現在はインドのダラムサラにある。

18日）に、101帙のカンギュルと225帙のテンギュルをキトンの信仰を持つたくさんの若者がけがれのない服を着て謹んで招請した。その時、「正法のお迎えは次のようにするべき」と後世の所化達に対して〔正しい法の迎え方を〕教えるために、尊者自身（イェシェーギェルツェン）もお身体に三衣を着て遠くから迎えて、手を合わせて前に立つ等、恭しい行いをなさって、自らお香を手にして、比丘達は数限りない種々の傘と、幢、飛幡、楽器のそれぞれ〔を持ち〕、その国のリーダー等限りない男女の施主達が、あるものは花、あるものはお香、あるものは良い匂いのする香水等供養のそれぞれをたくさん持って、タシーサムテンリン（bkra shis bsam gtan gling）寺の経堂に招請した。[113]

それから集会堂の東側の見目良い形の書架の東側に、１葉目は紺紙の金写、ウラ(94)と側面も図案と卍の吉祥の模様が金でかかれた〔カンギュルが置かれた。〕西側の綺麗な書架にテンギュルが置かれた。それら全てを、硫黄で着色された黄色の龍が書かれた緞子と赤い花模様の包み紙、ブロンドの緞子の帯等の衣服、青い模様のついた古い布、ブロンドの緞子を三重に重ねて作った題箋、中国式の屋根を模した形の経典の挟み板を水銀と金で豪華〔に飾ったもの〕、金で作った光沢のある留め金で飾ったシタホ（si ta ho）のベルト、それらの前にバター灯明の行列と、良い匂いのするお香の列がいつも途絶えず並んでいて、完全な御奉仕によって周り〔を囲むことで〕供養した。

水の馬（1762）の新年の８日に、尊者自身は曼荼羅の中心にお立ちになって、周りの密教行者の比丘35人と一緒に、善住の儀式を盛んになさった。またカンギュル、テンギュルの上に小屋を積み重ねたものに錫の屋根を付けたものと、小屋を積み重ねた上に米粒の大きさの舎利と、法身の仏舎利[114]が満ちに満ちた金メッキの完全に配置された見ても見飽きないゲンジラ

113　ヨンジン・パンディタが招請したキトンのナルタン版のこのカンギュル・テンギュルはキトンのサムテンリンがダライラマ（gong sa skyabs mgon chen po）に献じた。推測するなら今デリーのチベットハウス（訳者:ダライラマが設立したチベット学についての研究機関）にあるものがこれであろうか。この版本は他のナルタン版と違ってとてもはっきりしているため、成田山に設けられている研究所が一セット写真にとって保管している。

（ga nydzi ra＝mdzod ldan(95)）で光が触れ〔た者に〕一時と永遠の利益をあたえることができるものが完成した。尊者自身は比丘の集団と一緒に善住の儀式を7日間なさって、儀式の日に集まった無数の施主と僧俗に大乗の発心の戒を与えなさって、祝福の花の雨を降らせた。この年以来、先代ダライラマが亡くなった命日に合わせて僧侶達に十分に供養をし、カンギュルを読誦するたびに〔必要な〕毎年の減ることの無い基金も設けなさった。[115]

キトンにナルタン版のカンギュル・テンギュルを新しく招請した時に、ダライラマの師であるパンディタ・イェシェーギェルツェンが供養をどのようになさったかということは以上のとおりである。〔これは〕チベット全てにおいて〔カンギュル・テンギュルに〕供養をなさるやりかたとおおよそ同じである。

とにかくチベットのほとんどの寺院において、お言葉の拠りどころとしてカンギュル全てを安置して、最低でも毎年一回、有情の個々全てに幸せが来るために、経典を始めから終わりまで読誦する習慣とそれを供養するための基金もある。ところが日本の寺院では般若心経を全部読誦する以外は、カンギュルは無論、八千頌般若経さえも全部を読誦する習慣がないので悲しい。

詩にいう。

有雪の多くの人々の吝嗇から離れた豊かな布施と
深く広い智慧の蔵である翻訳師とパンディタの御事業から
良く生じたカンギュル・テンギュルの如意樹、
これこそは多くの五明のエッセンス中のエッセンスがある。
他の国の言語では文章すら訳したものは稀であり、
意味を間違いなく訳したものはさらに稀であり
顕密の全てを訳したという名前すら聞かない。
この三つ全てがそろったカンギュル・テンギュルを100回讃えよう。
上の人間でも仏説を貶める人の長はおらず、
下の人間でも〔仏法への〕随従を行なう人は人の家来にはいない。

---

114 『クンタン•テンペートンメのカルチャク•神の太鼓（*gung thang bstan pa'i sgron me'i dkar chag lha'i rnga chen*）』には「法身の仏舎利とは真言のこと」とある［Naritasan No, 2276, Ca 15a1］。

115 p. 82, l. 11.

鼻輪の紐に拘束されない自由な論理学者が
一生の間カンギュル・テンギュルを学ぶ経験である。
よく知られているカンギュル・テンギュルに収録されている仏説・論書の注釈を
改めて繰り返すつもりは無いが、
チベットの唯一の宝であるカンギュル・テンギュルの歴史を
私が教えを受け継いだ師達の思いを満たすために編纂する。
しかし歴史はガンジスの真砂のように〔限りないので〕
全てを説く勇気は無いが
部分的な要約を信仰の利益〔のために〕
広める（みなに伝える）喜びは黄金の山によっても表現できない。
この善行によって、あらゆる大学の
学者の業績・三蔵を
説き、訳し、著作する行いが、夏の湖のように
盛んで広く長くあり続けますように
私も晩年において、劫のように長い時間がたっても出会うのが難しい
仏説と論書を、説き、訳し、著作する
行いをさらにさらに増える状態で
内容を誤り無く得る吉祥あれ！

さて、「チベットにおける大蔵経（カンギュル•テンギュル）開版の歴史概観―ナルタンを思い起こすメロディー―」いうこの本を著作した経緯を述べる。

我々チベット人達の唯一の守護者である王・大臣・訳師・パンディタと伝統を守る学者達の徳を忘れないためにこういう本が著作されたら良いといつも望んでいたところ、西暦2001年８月２日にナルタンの座主チム一切智者ロサンタクパ（1299-1375）の高弟であるチョジェ・トントゥプリンチェン（chos rje don 'grub rin chen）が西暦1349年に建立なさったチャキュン寺に私が巡礼に行った時、アラ・シャルドン・リンポチェ（a lags shar gdong rin po che）が時輪の大潅頂の法輪を始める素晴らしい儀式に偶然出会った。それを機会に、そこで喜び・信心・楽しみによって著作を始めた。

そして、日本の関西の大学が合同で準備して大学が交代で毎年行なう大蔵会の時、学者をお迎えなさって講演する習慣があり、〔西暦2001年〕11月７日に行

なわれたその86回目の例会で私は三蔵についての講演をしてほしいとの要請を受けた。これは最高の機会だと考えて、光華大学の教授達を始めとする学者達に、チベットのカンギュル・テンギュルが出来たことについて詳しく述べた研究を日本語で発表した。その後、〔それは〕成田山仏教研究所の雑誌『法談』に掲載された。(96)

最後に〔回向の文章を〕述べる。良い出来事が起こった干支である水の雄の馬の年、カダムの教えを創始したチョボジェ具吉祥アティーシャがお生まれになった水の雄の馬の年、西暦982年から60年経った水の雄の馬の年、西暦1042年に〔アティーシャが〕チベットにいらっしゃり、〔その年〕に伝統を守るカダム派のゲシェー・ネウスルパ・イェシェーバル（dge bshes sne'u zur pa ye shes 'bar, 1042-1118）もお生まれになった。それから900年経った水の雄の馬の年、西暦1942年に、私はカンギュル・テンギュルが建立された清浄なるツァンの地で生まれた。そして還暦を迎えたラプジュン17周目の水の雄の馬のチベット暦１月１日、西暦では2002年２月13日に自宅であるチベット学研究室で新たに著した著者で、大寺院ガムリン（ngam ring）寺の完全なる大善知識チョジェ・ペルデン（chos rje dpal ldan）と大本山である具吉祥デプン寺の完全なる善知識ジャムゴン・ニマ・ギェルツェン（'jam dgon nyi ma rgyal mtshan）と、その高弟である尊者ラマ・ラキャブパ（bla ma lha skyabs）をはじめとする有雪の学者の最高峰の方々から、喜びとともにカダム・シュンパ（bka' gdams gzhung pa）の教えの大典籍五帙の講読を賜って、それを摂受して、加持の大徳により顕教・密教・他の学問と学説を説くのにささやかな弁才があり、カダムの経典の説法の伝統を保持する大谷大学の教授・チベット学者カンカル・ツルティム・ケサン・ジャンペルゲーベーシェーラブ（khang dkar tshul khrims skal bzang 'jam dpal dgyes pa'i shes rab）が祈る。チベットのカンギュル・テンギュルの教授が東西世界全てに盛んになりますように。

原著参考文献（訳者：配列の順番は原著による）

D. *The sde dge edition of the Tibetan Tripiṭaka*（*sde dge par ma'i dkar chag*）
Toh. *A Catalogue of The Tohoku University Collection Tibetan Works on Buddhism*（*tho ho khu'i dkar chag 'dir lha sa par ma'i bu ston dang / rje yab*

sras gsung 'bum sogs/), Tohoku Univ. 1953

kun mkyen si tu cho kyi 'byung gnas, *sde dge bka' 'gyur dkar chag gam bde bar gshegs pa'i bka' gangs can gyi brdas drang pa'i phyi mo'i tshogs ji snyed pa par du bsgrub pa'i tshul las nye bar brtsams pa'i gtam bzang po blo ldan mos pa'i ku-nda yongs su kha phye ba'i zla 'od gzhon nu'i 'khri shing*. Ta203a2-5, *Collected Works of the great Ta'i si tu pa kun mkhyen Chos kyi 'byung gnas bstan pa'i nyin byed*, Volume 9, Published by Sherab gyaltsen for Palpung sungrab nyamso khang, Sherab -ling Institue of Buddhist StudiesP. O. San sal, 176125, Dist. Kangra HP. India, 1990

sde dge zhu chen tshul khrims rin chen, *sde dge bstan 'gyur dkar chag gam kun mkyen nyi ma'i gnyen gyi bka' lung spyi dang bye brag gi dgongs don rnam par 'grel pa'i bstan bcos gangs can pa'i skad du 'gyur ro 'tshal gyi chos sbyin rgyun mi 'chad pa'i ngo mtshar 'phrul gyi phyi mo rdzogs ldan bskal ba'i bsod nams kyi sprin phun rgyas par dkrigs pa'i tshul las brtams pa'i gtam ngo mtshar chu gter 'phel ba'i zla ba gsar pa*, D No. 4569, Shri.

mkhas dbang dung dkar rin po che, *bod du dkar chag ji ltar byung ba'i lo rgyus, dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung rtsom phyogs bsgrigs*, krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1997.（訳者：dung dkar blo bzang 'phrin las［2004：10-27］に再録）

bdag chen nga dbang kun dga' bsod nams, *sa skya'i gdung rabs ngo mtshar bang mdzod*, mi rigs dpe skrun khang, 1986.

khang dkar tshul khrims skal bzang, *bstan pa snga dar gyi chos 'byung 'brel yod dang bcas pa'i dus rabs kyi mtha' dpyod 'phrul gyi me long*, Western Tibetan Cultural Association, New Delhi, 1985.

'gos lo gshon nu dpal, *deb ther sngon po*, si khrong mi rigs dpe skrung khang, 1984

khang dkar tshul khrims skal bzang, *chos mngon mdzod dang 'brel ba'i spyi bshad 'grel pa mngon pa'i rgyan gyi rgyan*, Western Tibetan Cultural Association, New Delhi, 1982.

—, *chos mngon pa'i lta grub 'phel rim 'brel yod dang bcas pa'i dpyad zhib mchims mdzod mdzes rgyan,*（*The Development of Thoght in the Abhidharma Literature*）, the Tibetan Buddhist Culture Association, Minamide-cho 22-9, Jodo-ji, Sakyo-ku, Kyoyo, Japan, 1992.

phur bu lcog ngag dbang byams pa, *grwa sa chen po bzhi dang rgyud pa stod smad chags tshul pad dkar 'phreng ba, Collected Works of Phur pu lcog nGag dbang byams pa,* Reproduced from a set of tracings from prints from the Phur bu lcog Hemitage blocks, by Ngawan sopa, Vol. 4, New Delhi, 1974.

dbal mang dkon mchog rgyal mtshan, *rgya bod hor sog gi lo rgyus nyung ngur brjod pa 'jug pa'i 'bab stegs, The Collected Works of dBal mang dKon mchog rgyal mtshan*, Reproduced from prints from the A-mchog dga'-ldan-chos-'khor-gling blocks, by Gyaltan gelek namgyal, Vol. 4, New Delhi, 1974

t'a'i si tu pa chos kyi 'byung gnas, *sgrub brgyud karma kaM tshang brgyud pa rin po che'i rnam par thar pa rab 'byams nor bu zla ba chu shel gyi phreng ba, Collected Works of the great Ta'i si tu pa kun mkhyen Chos kyi 'byung gnas bstan pa'i nyin byed,* Volume, 12, Published by Sherab gyaltsen for Palpung sungrab nyamso khang, Sherab -ling Institue of Buddhist Studies P. O. San sal, 176125, Dist. Kangra HP. India, 1990

Imaeda, Y, *Catalogue du Kanjur tibêtain de l'édition de 'Jang Sa-tham*, Premiere partie: Edition en facsimilié avec introduction (Biliographia Philologica Buddhica, Series Maior II A), The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1982, Seconde partie: Texte en entranslittération (Biliographia Philologica Buddhica, Series Maior II B), The Interbational Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1984.

mkhas pa bkra shis tshe ring, *a mdo rwa rgya'i bka' 'gyur gyi dkar chag par skrung sngon brjod*（*A History and brief survey of the contents of the A mDo Rwa rGya redaction of the Tibetan bKa' 'gyur*）, Library of Tibetan Work and Archives, Dharamsala, 1983, XIX.

mdo mkhar zhabs drung tshe ring dbang rgyal, *dpal mi'i dbang po'i rtogs pa brjod pa, 'jig rten kun tu dga' ba'i gtam*, si khrong mi rigs dpe skrun khang,

1981.

klong rdol ngag dbang blo bzang, *klong rdol ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum*, bod ljong bod yig dpe rnying dpe skrun khang, Dza Vol. II, 1991.

Tohoku Imperial University, *A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons（bka' 'gyur and bstan 'gyur）*, Sendai, Japan, 1934.

The Otani Daigaku Library, *A Comparative Analytical Catalogue of the Kanjur Division of the Tibetan Tripitaka, Kept in the Otani University Library,* Kyoto, Japan, Vol. I, II, III, 1903–1932.

paN chen rin po che bstan pa'i nyi ma?, *a mdo rwa rgya'i bKa 'gyur dkar chag gam bde bar gshegs pa'i gsung rab gangs can gyi skad du 'gyur ro cog gi phyi mo par du bskrun pa'i dkar chag mdo rgyud chos kyi sgo brgya cig car 'byed pa' i lde mig*.（訳者：原著に出版情報の記載無し）

Lokesh Chandra, *A Newly Discovered Urga Edition of the Tibetan Kanjur, Indo -Iranian Journal* III, 1959.

stag brag sprul sku ngag dbang gsung rab?, rgyal dbang sprul sku ngag dbang bstan 'dzin?, *lha sa bka' 'gyur dkar chag gam bdag cag gi ston pa mnyam med sh'akya'i rgyal po'i bka' gangs can 'dir 'gyur ro cog gi gsung par 'dzam gling spyi nor gyi legs bshad 'phrul gyi lde mig*.（訳者：原著に出版情報の記載無し）

bu ston, *zhwa lu'i bstan 'gyur dkar chag gam bstan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag yid bzhin gyi nor bu dbang gi rgyal po'i phreng ba*, Toh. No. 5205, La.

sgra tshad pa rin chen rnam rgyal, *sne gdong bstan 'gyur dkar chag gam bstan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag yid bzhin gyi nor bu rin po che'i za ma tog*, Toh. No. 5249, Sa.

gong sa lnga pa chen po（sde srid sangs rgyas rgya mtsho）, *'phyongs rgyas 'phying bar stag rtse'i bstan 'gyur dkar chag gam bstan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag 'jig rten gsum gyi bde skyid pad tshal bzhad pa'i nyin byed*, The Otani Daigaku Library, A Comparative Analytical Catalogue of the Tanjur Division

of the Tibetan Tripitaka, Kept in the Otani University Library, Kyoto, 1, 1-6, 2, 1-3, 1965-1997.（訳者：サンギェギャムツォがダライラマ５世の著作を装って執筆したもの）

phur bu lcog sku phreng dang po, *bka' yi dgongs pa 'grel ba'i bstan bcos 'gyur ro cog gi dkar chag don ldan tshangs pa'i dbyang*.（訳者：原著に出版情報の記載無し）

'jam dbyangs bzhad pa sku 'phreng gnyis pa 'jigs med dbang po, *co ne bstan 'gyur dkar chag gam bka' yi dgongs pa 'grel ba'i bstan bcos 'gyur ro cog gi dkar chag yid bzhin nor bu'i 'phreng ba, The Collected Works of dKon mchog 'jigs med dbang po,* Reproduced from prints from the bkra-shis-khyil blocks by Ngawang Gelek Demo, Vol. 5, New Delhi, 1971

Shinichiro, Miyake, "Comparative Table of the Golden Manuscript Tenjur in the dGa'-ldan Monastery with the Peking Edition of Tenjur", *Annual Memoirs of the Otani University*, Shin Buddhist Comprehensive Reseach Institute, Otani University, Kyoto, Vol. 17, 2000.

S. Yoshimura, *The Denkar-Ma, An oldest Catalogue of the Tibetan Buddhist Canon,* Kyoto, 1950.

A Comparative List of the bKa' 'gyur Division in the Co ne, Pekin, sDe-dge and sNar-thang Editions, with an Introduction to the bka' 'gyur Division of the Co-ne Editions, Camplied by T. mibu, Tokyo, 1963.

A Comparative List of the Tibetan Tripitaka of Narthang Editions (*bsTan-'gyur Divistion*) *with the sDe-dge Editions,* Campiled by T. Mibu, Tokyo, 1967.

Catalogue of the the Peking Tanjur, Volume1. Reproduced by Lokesh Chandra, New Delhi, 1983.

訳注(1)：本訳においては写本の形で建立された大蔵経を「本」とし、版木の形で建立された大蔵経を「版」とする。

訳注(2)：原文は Transmission of the bKa' 'gyur. 本訳では Transmission を省略した。

訳注(3)：原文は Transmission of the bsTan ’gyur. 本訳では Transmission を省略した。

訳注(4)：デンカルのカンギュル・テンギュルについては羽田野伯猷「チベット流伝前期の王室仏教備考」もある［羽田野1986：304-336］。

訳注(5)：大校閲翻訳師（zhu chen gyi lo tsā ba）の一人で、他のチョクロ・ルイギェルツェン（cog ro klu’i rgyal mtshan）、シャン・イェシェデ（zhang ye shes sde）と並んで、前伝期の仏典の翻訳事業を担った一人［川越2005a：125］。

訳注(6)：原文は bcom ldan ’das kyi ring lugs kyi mdun sa（or ’dun sa）。古代チベットにおける仏教関係の事項を総理する権限を持つ会議［羽田野1986：309-310］。

訳注(7)：「試みの 7 人」中の一人に数えられ、大校閲翻訳師に選定された 9 人の一人である［川越2005a：125］。

訳注(8)：ンゴク大翻訳官と呼称される。ンゴク・レクペーシェーラプ（rngog legs pa’i shes rab）の甥。カシミール、ネパールに留学して密教を学ぶ。サンプ僧院の教学の大成者。その法統はカダム第三の流派シュンルー（gzhung lugs）として知られる［羽田野1986：284-285］。

訳注(9)：史料の書誌情報は *Collected Works of the great Ta’i si tu pa kun mkhyen Chos kyi ’byung gnas bstan pa’i nyin byed*, Volume 9, Published by Sherab gyaltsen for Palpung sungrab nyamso khang, Sherab -ling Institue of Buddhist Studies P. O. San sal, 176125, Dist. Kangra HP. India, 1990。

訳注(10)：ティデソンツェン（Khri lde srong btsan, 776生：在位803-815）を指す。

訳注(11)：原文「phyi rabs mkhas pa’i blo tshod brtag phyir」先学が後学を試すためにわざと間違った学説を説いたという意味。先学の学説が間違っているということを婉曲に示す表現である［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(12)：山口［1985：13］はデンカルマ目録の成立をパンタンマ目録の前とする。一方、川越［2005a：126］はパンタンマ目録にはデンカルマ目録の存在を示唆する記載がないので、両目録の成立の前後を確定することはできないとしている。

訳注(13)：デンカルマ目録の成立年代については824年とするものが山口［1985］、812

年とするものが Tucci［1958］、836年とするものが原田［1982］。近年では824年説が主流のようである［川越2005a］。

訳注(14)：原文では D. No. 7とあるが D. No. 7は『律上分』である。『般若波羅蜜多二萬五千頌』は D No. 9, Ka-Ga に収められているので、原文の D. No. 7は No. 9の誤りであろう。

訳注(15)：生没年1385年-1438年。レンダワ（ren mda' ba）より比丘戒を受け、後にツォンカパの弟子となる。第 3 代ガンデンティパを務める。略伝はツルティム・小谷［1985：36-37］にある。

訳注(16)：「『量釈頌』・『量決択』及びその諸注釈」の原文は『rnam 'grel rnam nges 'grel chen dang bcas pa』。「rnam 'grel」は D. No. 4210にある『量釈頌』、「rnam nges」は D. No. 4211にある『量決択』だと考えられる。二つともダルマキールティ（600-660）の著作である。そして D. No. 4216-4225に『量釈頌』の注釈が、D. No. 4228-4229に『量決択』の注釈がある。「'grel chen」はこれらの諸注釈の内のいずれかを指していると考えられる。

訳注(17)：ナルタン本カンギュル・テンギュルの開版についての研究は羽田野伯猷「チベット大蔵経縁起　1」［羽田野1987：197-292］もある。

訳注(18)：原文は grog su。ツルティム・ケサン氏の教示によれば普段は水が流れていない谷を指す。Roerich［1949: 337］では ravine とする。

訳注(19)：原文は mi g-yo ba'i bsnyen pa。mi g-yo ba を不動明王と訳すのはツルティム・ケサン氏の教示による。Roerich［1949: 337］では「he recited the mantra of Acalā 13,000,000,000 times」と訳す。サンスクリット語の .Acalā は榊［1962：No. 893］によればチベット語の mi g-yo ba、漢語の不動地に対応する。

訳注(20)：原文は shes rab kyi nam langs。Roerich［1949: 337］では「the dawn of wisdom rose in him」と訳す。

訳注(21)：この人物については小谷［1995：5-10］を参照。

訳注(22)：元の仁宗（Ayurbarimad Buyan tu、生没年1285-1320年、在位1311-1320年）を指す［福田・石濱1986：186］。またこの人物が即位した複雑な政治的経緯については杉山［1996：170-186］に概説されている。

訳注(23)：原文は「der tshad ma rnam 'grel gyi Tī ka bsdus pa dang bcas pa brtsams」。Roerich［1949: 337］ではこの部分を「There he wrote a short commentary on the *Pramāṇaviniścaya*.」と訳しているが、ツルティム［2002：127］では「『ツェーマ・ナムデル（*Tshad ma rnam 'grel*, Skt. *Pramāṇavārttika*）』に対する広略二つの注釈を著作した」と訳す。ここではツルティム［2002］に従う。

訳注(24)：原文は「rin po che las bzhengs」金銀を溶かしたものをインクにして筆写したことを指す［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(25)：モンゴル語で出家者もしくはラマの意味。

訳注(26)：チベットの名門チム（mchims）家の出身。ナルタン寺でカーダムの法を学び、サンプ僧院の教学をナルタン寺に導入した人物である。略伝は羽田野伯猷「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」［羽田野1987：171-183］にある。

訳注(27)：原文はdpyad pa gsum。もともとは論理学の用語。

訳注(28)：大元ウルスの創始者であるクビライが1270年にサキャ・パンディタの甥であるパクパを帝師に任じたことによってチベット仏教教団は大元ウルスの宮廷で大きな勢力を持つ。大元ウルス皇帝は法会の開催等でチベット仏教僧に多くの物質的•経済的援助を行った。ナルタン版カンギュル•テンギュルの建立にあたってモンゴルからチム•ジャンペーヤンがチョムデン•リグペーラルティに多く物資を送った事もこうした歴史的背景のもとで行われたのである。大元ウルスとチベットとの関係については、中村［1997］に概観されている。なお、歴代の元の帝師の中にはチム•ジャンペーヤンの名前は確認できないが［稲葉1964］、帝師以外の多くのチベット僧が大元ウルスに赴いて物質的な援助を受けていた。その実態については山本［2008］を参照。

訳注(29)：この経典の解説と一部の訳注を行ったものが小谷［1995］。

訳注(30)：飾り（rgyan）とは注釈の比喩。注釈の注釈とは、倶舎論についての注釈にさらに自分の注釈を付け加えたという意味［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(31)：プトンについてはそのナムタル（伝記）の訳注にRuegg［1966］がある。

訳注(32)：？は原文ママ［Tsultirm 2003: 96］。

訳注(33)：ツェルパの万戸長でチベット語歴史書『フゥラン•テプテル』の著者［稲葉•

佐藤：1964]。ツェルパの万戸長の系図はTucci［1980 vol. 2: genealogical Tables, no. II］にある。

訳注(34)：カルマパ黒帽8世。略伝はDouglas・White［1976: 73-78］。またカルマ派の化身ラマについてはKarma Thinley［1980］もある。

訳注(35)：永楽版カンギュルに関する他の研究は羽田野伯猷「永楽刻チベット蔵経おぼえ書き」［羽田野1987：327-356］、Silk［1996］がある。

訳注(36)：シャキャイェシェーについての専論として沈［1995］（未見）、陳［2005］がある。ツォンカパの代わりに永楽帝の招請に応じ、永楽12年（1414）に永楽帝に謁見し、大慈法王の法号を下賜される。

訳注(37)：明朝皇帝はチベット政策上の必要性やチベット仏教への信仰心のために、多くのチベット仏教僧を招聘して経済的な援助を行った。このような歴史的背景のもとでシャキャイェシェーが明朝より永楽版カンギュルを入手したと考えられる。明朝とチベット仏教僧の関係については佐藤長「明朝冊立の八大教王について」［佐藤1986：173-247］、同「明廷におけるラマ教崇拝について」［佐藤1986：287-320］、乙坂［1998］、沈[2007]。また永楽帝のチベット仏教信仰を示す重要な事件としてカルマ派黒帽5世テシンシェクパ（de bzhin gshags pa）の招聘と彼を首座とした法会の開催があるが、これについての専論はSperling［1979］、乙坂［1997］、Berger［2001］がある。

訳注(38)：原文はthem skas。tham ka（印）のことか。皇帝の命によって版刻されたので皇帝の印璽が押されていると考えられる。

訳注(39)：書物の冒頭の頁に挿入される仏画。

訳注(40)：ギャンツェのペンコル・チューデ寺を建立した人物［Tuuci1989vol1: 17-18］、熊［1996：18-22］。またサキャ派と関係が深く、ウィ・ツァンを支配していたパクモドゥ政権に反乱を起こしたが、事件の詳細は不明である。［佐藤長「パクモトゥパ政権初期のチベット状勢」（佐藤［1986：89-171］］。ギャンツェの領主の系図はTucci［1980, vol2: genealogical TablesNo. X］にある。

訳注(41)：万暦朝における明朝とチベット仏教との関係は乙坂［1993：1-7］に述べられている。

訳注(42)：ジャンは現在の雲南省麗江納西族自治区にあたる。

訳注(43)：生没年1584年-1630年。略伝はDouglas・White［1976: 146-149］に述べられている。

訳注(44)：ジャン王とチベット仏教の関係については山田［2008］がある。

訳注(45)：グシ・ハンとも呼称される。オイラトの支部族であるホショト部の族長であり、1630年代にジュンガリアより青海に進出し、1642年にはラサに進出してカルマ派の施主ツァンパカンを撃ち、ウィ、ツァン、カム、アムドを勢力下に入れて、ダライラマ政権を成立させる。これはチベットにおけるゲルク派とカルマ派の抗争にグシ・カンが介入したものであり、彼がゲルク派の施主となったために、後にホショト部とカルマ派の施主であるジャン王との対立が生じる。その過程についてはAhmad［1970］や山口［1963, 1992, 1993a, 1993b］に詳しい。

訳注(46)：彼の一族の系譜は佐藤長「青海オイラット諸部落の起源」［佐藤1986：461-467］にある。

訳注(47)：カンドは1669年までにカム南部のカルマ派勢力を鎮圧した。この時期にカンギュルを麗江からリタンに移したと考えられる。しかし後に彼はカルマ派を支持し、1674年にダライラマ５世が派遣した同族のホショト部と戦って敗死する。カンドの活動については陳［1996：130-134］を参照。

訳注(48)：*The Collected Works of dBal -mang dKon-mchog-rgyal-mtshan*, Reproduced from the a-mchog dga' -ldan-chos-'khor-gling blocks, by Gyaltan gelek namgyal, Vol. 4, New Delhi, 1974.

訳注(49)：リタン版カンギュルが焼失した歴史的背景を述べる。1904年においてヤングハズバンドの率いるイギリスの武装使節団がラサに進入したことにより、イギリスの勢力がチベットに及ぶことを恐れた清朝は、1905年から1911年にかけて四川省の管轄下にあるカムのチベット人に対して、土司制度による間接統治から直接統治に改めることを行なった。その施行の際に各地のチベット人の抵抗があり、リタンでは1905年から1906年までチベット人と清朝軍との軍事的抗争が続いた［馮1996：209-254］。リタン版カンギュルが失われたのは恐らくこの時の兵火によるものだと考えられる。20世紀初頭における清朝及び中華民国のカム政策についての研究として、Speling［1976］、中島［1988］がある。

訳注(50)：シッキムの大臣［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(51)：釈迦の誕生日を指す。

訳注(52)：チョネ王については楊［1990］及びmgon po dbang rgyal［1997］が基礎的な研究。他にチョネに関する研究として伴［2004, 2006］もある。

訳注(53)：この寺院についての研究は覚乃・洛桑丹珠、冰角・婆帕次仁［1995］がある。

訳注(54)：生没年1675年-1748年。チョネ出身、中央チベットに留学した後、1714年にチョネ寺の顕教学堂の長となる。略伝は民族図書館編［1984：449-451］に述べられている。

訳注(55)：ダライラマ6世が1705年にラサン•ハンによって廃位され、清朝軍によって北京に護送される途中、1706年に青海湖で死去した事件を指す。この前後の政治状況についてはPetech［1972：8-31］に述べられている。

訳注(56)：グシ•ハンの孫。1705年、ダライラマ政権の摂政サンギェギャムツォを殺害し、ダライラマ6世を廃位するが、1717年にラサに進入したジュンガル軍に殺害される［Petech1972: 8-31］。

訳注(57)：ジュンガル占領下におけるダライラマ政権の事実上の長となるが、1721年にジュンガル軍をチベットより撃退した清朝によって殺される。この前後の政治的状況に関してはPetech［1972：32-73］に述べられているが、Petechが用いなかった満洲語史料を利用してその全体像を明らかにした研究として石濱裕美子「清朝によるチベット平定の実像」［石濱2001：259-319］がある。

訳注(58)：カンチェンネー（khang chen nas）と呼称される。1720年、清朝によってダライラマ政権の首班に任ぜられるが、1726年に政権内の内紛によって謀殺される。前後の政治状況に関してPetech［1972: 74-121］が基礎的な研究であるが、近年の研究として鄧［2002］、柳［2004, 2008］がある

訳注(59)：生没年1689年-1747年。1726年にソナムギェルポ（カンチェンネー）を謀殺したンガプーパ（nga p'od pa）、ルンパネー（lum pa nas）の軍を破り、清朝の後援及び監視のもと1747年までチベットを統治する。Petech［1972: 122-197］を参照。後述するナルタン版テンギュルの施主でもある。

訳注(60)：デルゲ版カンギュルの開版についての研究は羽田野伯猷「チベット大蔵経縁起　2」[羽田野1987：293-326]もある。

訳注(61)：デルゲ王についての研究はKolmas［1968, 1988］、任［1990］がある。

訳注(62)：デルゲ印経院の現況については池田・中西・山中［2003］及び楊［2000］が詳しく紹介している。

訳注(63)：青海ホショトがジャンサタム王から奪ったジャン版カンギュルを指す。「時代の流れで（dus dbang gis）」と婉曲に書いているのは、青海ホショトと施主-応供僧関係にあったダライラマ及びゲルク派を憚っているからだと考えられる［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(64)：ショル版カンギュルの開版については多田・高崎［1960］の紹介があり、その歴史的背景となったダライラマ13世の仏教振興政策については浅井［2007：25-34］に述べられている。この前後の政治史についてはGoldstein［1989］に概説されており、近年の研究として日高：［2006a, 2006b, 2007, 2008］もある。

訳注(65)：ダライラマ13世没後に摂政を務める。1947年に逮捕され獄死。略伝はPetech［1988：146］に述べられている。

訳注(66)：ランドゥン家はダライラマ13世の親族（yab gzhis）でクンガ・ワンチュク（1906-1968以後）はダライラマ13世の甥にあたる。1924年より1939年までダライラマ政権の中枢に参画。チベットが中華人民共和国に併合された後は西蔵自治区政府の幹部として活動。略伝はPetech［1973: 23-25］に述べられている。

訳注(67)：ラデン・トゥプテンジャムペル後に摂政を務める。略伝はPetech[1988: 146]に述べられている。

訳注(68)：ンゴル派はクンガ・サンポ（kun dga' bzang po, 1382-1456）を始祖とするサキャ派の分派である。宗派の概要は立川［1974：67-68］に述べられている。

訳注(69)：ヤブツァンは直訳すると「父の家」。チャムドのチャンパ寺の化身ラマであるパクパラ（'phags pa lha）の親族に対する呼称［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(70)：クシャンとはシャルの長の称号である。Tucci［1980, vol2: 706: note995］に語源解説あり。

訳注(71)：シャルの５代目のクシャン。シャルのクシャンの系図はTucci［1980, vol2: genealogical Tables no. XV Ⅰ］にある。

訳注(72)：生没年1302年-1364年。サキャ派を破って1354年にウィ・ツァンを統一する。その伝記は佐藤長「パクモトゥパ政権初期のチベット状勢」［佐藤1986：89-171］、Kuijp［1991］にある。

訳注(73)：経典の名前とも考えられるが不明。

訳注(74)：実際はこの時既に亡くなっているダライラマ5世のための回向であるが、内外に対してダライラマ５世は生存していることを装っているため、このような書き方になった［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(75)：ダライラマ５世が詩を書くときに用いる名前［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(76)：1679年にダライラマ政権の摂政となり、ダライラマ５世の死後、ジュンガルと結んで清朝と対抗するが、1696年にジュンガルのガルダンが清朝に敗北したことにより、その外交政策は挫折し、1705年に青海ホショトのラサン・カンに殺害される。略伝はPetech［1988：135］にある。またにサンギェギャムツォに関する専論としては山口1988、石濱裕美子「摂政サンゲギャムツォの著作に見るチベットの王権論」［石濱2001：259-279］がある。

訳注(77)：ダライラマ５世は1682年に亡くなっているが、ダライラマ政権は清朝との関係において自己を優位な立場に保つためにジュンガルと青海ホショトを掌握しなければならなかったので、彼らに宗教的影響力を持つダライラマ５世の死は秘匿された。この前後のダライラマ政権の動向については山口［2006：61-69］に詳しく述べられている。

訳注(78)：義和団事件を指すと考えられる。

訳注(79)：生没年1011年-1037年。アティーシャをチベットに招く。インドの論書をチベット語に翻訳した。

訳注(80)：10月25日はツォンカパの命日である。

訳注(81)：ンガクワンチャムパ（ngag dbang byams pa, 1682-1762）を指す。

訳注(82)：生没年1382年-1444年もしくは1450年。サキャ出身でツァンにエワム•チョデン寺を建立。ンゴル派の祖［羽田野1987：298］

訳注(83)：エワム•チョデン寺の30代目の座主。テンパツェリンの師として1728年にデルゲに招請される［羽田野1987：323］。

訳注(84)：ツルティム•ケサン氏の教示によればカルマパの黒帽を指す。藍色を黒色に見立てていると考えられる。

訳注(85)：カルマパ黒帽化身ラマ11世。略伝はDouglas•White［1976: 91-92］に述べられている。

訳注(86)：原文は「slad chad rtun pa lhur byed pa rnams」ツルティム・ケサン氏の教示によれば「後生の努力する人たち」という意味である。ここでは後学と訳した。

訳注(87)：密教の経典のランク付けについて、プトンとは異なるゴルチェンの見解を採用したこと。プトンはカーラチャクラタントラを最高として目録の先頭に持ってきたが、ゴルチェンはヘーヴァジラタントラを最高としているので、デルゲ版はそのやりかたに従った［ツルティム・ケサン氏の教示］。

訳注(88)：再添後字 da は「強調の da（da drag po）」と称され、na, ra, la の三字の後に添えられる。814年に欽定訳語を定めたティデソンツェン（776-815）の頃から現在にいたるまで省略されるようになった。本来なら shin や kun は shind や kund であり、da の後につける助辞は連声規則に従って tu がつけられるが、da が省略されたため、na の後につけられる du が書かれるようになった。

訳注(89)：テンスンツェリンは1743年に生まれ、1760年にチョネの領主となる。原文ではリンチェンペルゾムはテンスンツェリンの母親と述べられているが、彼の祖母である。1754年から1760年にかけて幼少のテンスンツェリンに代わってチョネを統治した。以上の記述は楊［1990：67-68］による。

訳注(90)：原文は sa bcad rtsa stong du ma song tsam。直訳すると「科文が空白にならない程度に」科文 sa bcad とは経典、論書を解釈するのに、本文をその内容によって大小の段落に区切り、それらの内容を短い標語にまとめたり、全体の構成を図に示したりするもの。

訳注(91)：生没年1713年-1793年。

訳注(92)：ペーツェル(pad tshal)家はツァンに本拠を置く貴族。この時期の当主はタシーダルギェー（bkra shis dar rgyas）か？　彼はツァンのダプン（mda' dpon）に任ぜられた。この一族はイェシェーギェルツェンと関係が深かった［Petech1973: 205-208］。

訳注(93)：チャムティン（byams sprin）はキトンにある寺院の名。

訳注(94)：経典の冒頭のペチャに印刷されている神仏像。

訳注(95)：チベット仏教寺院の頂上についている宝瓶のようなもの。

訳注(96)：ツルティム［2002］を指す。

訳注参考文献

和　文

浅井　万友美

2007 「ダライラマ13世(1876-1933)の宗教政策―仏教振興策とその要因―」『日本西蔵学会々報』53、pp. 25-34

池田　巧、中西純一、山中勝次

2003 『活きている文化遺産デルゲパルカン』明石書店

石濱　裕美子

2001 『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店

稲葉　正就

1964 「元の帝師に関する研究」『大谷大学研究年報』17、pp. 81-156

稲葉　正就、佐藤　長（訳）

1964 『フゥラン・テプテル―チベット年代記―』、法藏館

今枝　由郎

1989 「チベット大蔵経の編集と開版」『チベット仏教』、岩波書店

上山　大峻

1997 「呉和尚蔵書目録（効761）について」『日本西蔵学会々報』41•41、pp. 3-9

小谷　信千代

1995 『チベット倶舎学の研究―「チムゼー」賢聖品の解読―』、文栄堂書店

乙坂　智子

1993 「ゲルクパ・モンゴルの接近と明朝」『日本西蔵学会会報』39、pp. 1-7

1997 「永楽５年「御製霊谷寺塔影記」をめぐって―明朝によるチベット仏教導入の一側面」『日本西蔵学会々報』41-42, pp. 11-21

1998 「在京チベット仏教僧に対する明朝の姿勢」『蛮夷の王、胡羯の僧』平成8•9•10

年度科学研究費補助金報告書 pp. 49-145
川越　英真
2005a 「『パンタン目録』の研究」『日本西蔵学会々報』51、pp. 115-131
2005b 同『dKar chag 'Phang thang ma』、東北インド・チベット研究会
榊亮三郎
1962 『梵藏漢和四譯對校飜譯名義大集』（第 2 刷）、鈴木学術財団
佐藤　長
1986 『中世チベット史研究』、同朋舎
佐藤　直美
2008 『蔵漢訳『阿閦仏国経』研究』、山喜房佛書林
杉山　正明
1996 『モンゴル帝国の興亡』下、講談社
多田等観・高崎直道
1960 「東京大学文学部所蔵ラサ版大蔵経について」『日本西蔵学会会報』6
立川　武蔵
1974 『西蔵仏教宗義研究』第 1 巻、東洋文庫
沈　衛栄（片桐宏道訳）
2007 「『懐柔遠夷』言説における明代中国とチベットの政治•文化関係」『中国東アジア外交交流史の研究』、京都大学学術出版会、2007、pp. 264-310
ツルティム・ケサン
2002 「チベット大蔵経とその影響」『法談』47号、pp. 123-144
2008 「仏道の修学と伝統の継承について―退職にあたって―」『仏教学セミナー』88、pp. 1-27
ツルティム・ケサン、小谷　信千代
1985 「ゲルク派小史（下）」『仏教学セミナー』42、pp. 35-45
ツルティム・ケサン、藤仲孝司（訳）
2005a 『ツォンカパ菩提道次第大論の研究』、文栄堂書店
2005b 『悟りへの階梯―チベット仏教の原典「菩提道次第論」』、星雲社
中島　敏
1988 「西康建省と民族運動」『東洋史学論集』汲古書院、pp. 533-577
中村　淳
1997 「チベットとモンゴルの邂逅―遙かなる後世へのめばえ―」『岩波講座世界歴史―中央ユーラシアの統合：9-16世紀―』第11巻、岩波書店、pp. 121-146
羽田野　伯猷
1986 『チベット・インド学集成』第 1 巻、法蔵館
1987 『チベット・インド学集成』第 2 巻、法蔵館
原田　覚

1982 「lDan dkar ma 目録考」『仏教教理の研究』春秋社、pp. 607-617

伴　真一朗

2004 「三藩の乱におけるチョネ（co ne）領主の軍事活動」『日本西蔵学会々報』50

2006 「清朝の青海支配確立期におけるチョネ（Co ne）領主の役割とその意義―清朝とテボ（The bo）のチベット人との紛争をてがかりにして―」『内陸アジア史研究』21、pp. 17-31

日高　俊

2006a 「ダライラマ13世時代における軍事教練改革運動について」『大谷大学大学院研究紀要』23、pp. 137-169

2006b 「ダライラマ13世２度目の亡命後のラサ周辺政治情勢―セラ寺攻撃までを中心に―」『東洋史苑』67、pp. 1-28

2007 「ダライラマ13世二度目の亡命の意義について」『日本西蔵学会会報』53、pp. 35-44

2008 「民国成立期（1912-13）中国とダライ・ラマ政権―ダライ・ラマ帰還と和平交渉―」『中国研究月報』62-8、pp. 48-60

福田　洋一、石濱　裕美子

1986 『西蔵仏教宗義研究』第４巻、東洋文庫

芳村　修基

1974 「The Denkar-ma」『インド大乗仏教思想研究』百華苑、pp. 99-199（初出1950）

山口　瑞鳳

1963 「顧実汗のチベット支配に至る経緯」『岩井大慧博士古希記念典籍論集』

1985 「『デンカルマ』824年成立説」『成田山仏教研究所紀要』9、pp. 1-61

1988 「摂政サンゲェー・ギャンツォの出自をめぐって」『榎博士頌寿記念東洋史論叢』、汲古書院、pp. 443-458

1992 「ダライラマ５世の統治権―活仏シムカンゴンマと管領ノルブの抹殺―」『東洋学報』73-3. 4、pp. 123-160

1993a 「17世紀初頭の青海トゥメト部」『成田山仏教研究所紀要』16、pp. 1-26

1993b 「17世紀初頭のチベットの抗争と青海モンゴル」『東洋学報』74-1•2、pp. 1-25

2006 「第一次ダライラマ政権の崩壊と清朝•青海の関与」『成田山仏教研究所紀要』29、pp. 47-99

山田　勅之

2008 「明代の雲南麗江ナシ族・木氏土司とチベット世界の関係」『日本西蔵学会』54、pp. 79-92

山本　明志

2008 「モンゴル時代におけるチベット・漢地間の交通と站赤」『東洋史研究』67-2、pp. 95-120

柳　静我

2004 「『駐蔵大臣』派遣前夜における清朝の対チベット政策―1720～1727年を中心に―」『史学雑誌』113-12、pp. 59-83
2008 「カンチェンネー暗殺と清朝の対応―雍正期、対チベット政策の一側面―」『満族史研究』7、pp. 51-79

中　文

覚乃・洛桑丹珠、冰角・婆帕次仁
1995 『安多古刹禅定寺』、甘粛民族出版社
沈　衛栄
1995 「明烏斯蔵大慈法王釈迦也失事跡攷述」『両岸蒙古学蔵学学術研討会論文集』、蒙蔵委員会
陳　浩昀
1996 「罕都事件及其対清初川求藏区的影響」『中国蔵学』1996-3、pp. 130-134
陳　楠
2005 『明代大慈法王研究』、中央民族大学出版社
鄧　鋭齢
2002 「年羹堯在雍正朝初期治蔵政策孕育過程中的作用」『中国蔵学』2002-2、pp. 78-89
任　乃強
1990 「徳格土司世譜」、『民族研究論文集』、pp. 242-271、民族出版社
馮　明珠
1996 『近代中英西蔵交渉與川蔵辺情―従廓爾喀之役到華盛頓会議―』、国立故宮博物院
民族図書館（編）
1984 『蔵文典籍目録』第1冊、四川民族出版社
熊　文彬
1996 『中世紀蔵伝仏教芸術―白居寺壁画芸術研究―』、中国蔵学出版社
楊　嘉銘
2000 『徳格印経院』、四川人民出版社
楊　士宏
1990 『卓尼土司伝略』、四川民族出版社

欧　文

Ahmad, Z.
1970 *Sino-Tibetan relations in the seventeenth century*. Roma: Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
Berger, P.
2001 “Miracles in Nanjing: An Imperial Record of the Fifth Karmapa’s Visit to the Chinese Capital”, *Cultural Intersections in Later Chinese Buddhism*.

Honolulu: University of Hawaii Press, pp. 145-169.

Douglas, N. and White, M.

1976 Karmapa: the Black Hat Lama of Tibet. London: Luzac.

Eimer, H.

1983 *Rab tu 'byung ba'i gzhi, Die tibetische Übersetzung des Pravrajyāvastu im Vinaya der Mūlasarvāstivādins.* (Asiatische Forschungen 82), Wiesbaden.

Goldstein, M C; with the help of Gelek Rimpoche.

1989 *A history of modern Tibet, 1913-1951: the demise of the Lamaist state*. Berkeley: University of California Press.

Harrison, P.

1996 "A Brief History of the Tibetan bKa' 'gyur", *Tibetan literature : studies in genre*. Ithaca, N. Y.: Snow Lion, pp. 70-94.

Halkias, G.

2004 "Tibtan Buddhism Registered", *Eastern Buddhist New series* 36-1/2, pp. 46-105.

KarmaThinley

1980 *The history of Sixteen Karmapas of Tibet*, Prajna Press, Boulder.

Kolmas, J.

1968 *A genealogy of the kings of Derge*, Oriental Institute in Academia, Prague.

1988 "Dezhung Rinpoche's Summary and Continuation of the Sde-dge'i rgyal-rabs", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 42-1, pp. 119-153.

Kuijp, LW. J.

1991 "On the life and political career of Ta'i-si-tu Byang-chub rgyal-mtshan (1302-?1364)", *Tibetan history and language: studies dedicated to Uray Geza on his seventieth birthday*. Wien: Arbeitskreis fur tibetische und buddhistische Studien, Univer sitat Wien.

Lalou, M.

1953 "Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sron-lde-bcan", *Journal Asiatique* 241, pp. 313-353.

Petech, L.

1972 *China and Tibet in the early XVIIIth century*, 2nd. Revised. Leiden: E. J. Brill. Leiden.

1973 *Aristocracy and government in Tibet, 1728-1959*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

1988 "The Dalai-Lamas and regents of Tibet: a chronological study", *Selected papers on Asian history*. Roma: Estremo Oriente, 1988, pp. 125-147.

Ruegg, D.

1966　*The life of Bu ston Rin po che, with the Tibetan text of the Bu ston rNam thar*. Roma : Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1966.

Silk, J.

1996　"Notes on the History of the Yongle Kanjur", *Suhrllekhah: Festgabe fur Helmut Eimer*. Swisttal-Odendorf: Indica-et-Tibetica-Verl., 1996, pp. 153-200.

Sperling, E.

1976　"The Chinese Venture in K'am, 1904-11, and the Role of Chao Ert-feng" *The Tibet Journal*1-2, pp. 10-35.

1979　"The 5th Karma-pa and Some Aspects of the Relationship between Tibet and the Early Ming", *Tibetan studies in honour of Hugh Richardson: proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies*. Oxford, 1979.

Tucci, G.

1958　*Minor Buddhist Texts*, Part 2. Roma.

1989　*Gyantse and its monasteries*. 3vols, New Delhi: Aditya Prakashan.

1980　*Tibetan painted scrolls*, 3vols, Kyoto: Rinsen Book（初版は *Tibetan painted scrolls*, Roma: La Libreria Dello Stato, 1949）

チベット文

dung dkar blo bzang 'phrin las

2004　bod kyi dkar chag rig pa, *mkhas dbang dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung 'bum*, kha, mi rigs dpe skrun khang.

mgon po dbang rgyal

1997　*co ne sa skyong gi lo rgyus klu chu sngon mo'i gyer dbyangs*, 甘粛民族出版社

Tsultirm Kelsang Khangkar

2003　yul gangs can gyi bka' bstan dkar chag dang bcas pa'i lo rgyus rags tsam brjod pa snar thang dran dbyangs（The Melody Recalling sNar thang: A Rough Exposition of the History of the *bsTan 'gyur* and *bKa' 'gyur* in the Land of Snow）.『真宗総合研究所研究紀要』20、pp. 83-131.